

河南町文化財調査報告書 第8集

# 群田遺跡

平成5年3月

宮城県 河南町教育委員会

ぐん てん  
群 田 遺 跡

## 発刊の辞

河南町北村青木部落の裏蔵に、群田という地名があります。今は人家1軒もなく、人里離れていますが、昔は1、2軒家があったと伝えられ、遺跡となっていました。

そこへ平成3年度石巻地区広域行政事務組合施行の、衛生センター建設の話が持上りました。

やはりそのような施設は、人里離れたところがよい、というわけでしょう。

となると「開発行為」であり、遺跡については、文化財調査が必要となり、当教育委員会の仕事となります。

発掘調査専門職の資格を有する中野裕平主事が、担当して約9ヶ月間の調査に取組みました。

地元から作業員の協力を得て、地道な調査が続けられました。

その結果、古代の住居跡、そして近世期の室年代のわかる資料が発見されました。

伝えの通り、嘗て人家のあったところが、ハッキリしたわけであります。その当時の人の生活ぶりがわかり、歴史を知る上で貴重な発見となりました。

現在、河南町では、文化財発掘調査が、数ヶ所行われています。従って専門調査員は、寧日ない多忙の毎日を続けています。

今回漸く群田遺跡発掘調査の結果表(記録書)がまとまりました。

時間が余計かかりましたが、調査員の多忙等の故と御容赦下さい。

調査に御協力いただきました作業員その他各位に厚く御礼申し上げて、発刊の辞といたします。

平成5年3月

河南町教育委員会 教育長 浅野 鐵雄

## 例 言

- 本書は、瀬牛センター建設（更新）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として実施された調査の報告書である。
- 発掘調査は、次の要領で実施した。

- 〔遺 墓 名〕 斎田遺跡(遺跡番号: 69042)
- 〔現 在 地〕 宮城県仙台市河原町北村字斎田15番地の1
- (調査対象面積) 15.620坪(調査面積: 9.739坪)
- 〔調査期間〕 平成3年1月27日～平成3年12月27日(確認調査)  
平成4年2月24日～平成4年3月31日(確認調査及び一部事前調査)  
平成4年4月7日～平成4年8月28日(事前調査)
- 〔調査主任〕 河南町教育委員会社会教育部 上事 中野裕平
3. 調査課題： 宮城県教育庁文化財保護課
4. 先づ調査上報告書作成に当り次のの方々から指導・協力をいただいた(敬称略)。
- 〔報告書作成〕 宮城県多賀城跡調査研究所：進藤秋輝、丹羽茂、真山悟、村田晃一  
東北歴史資料館：河野博志  
宮城県河南高等学校：相原淳一  
河南町教育行政連絡会長：遠藤哲夫
- 〔報告書作成〕 宮城県多賀城跡調査研究所：進藤秋輝、丹羽茂、真山悟、村田晃一  
仙台市教育委員会：佐藤洋  
多賀城跡埋蔵文化財調査センター：石川俊英、千葉孝弥  
森町立教育委員会：八木光則、小原俊巳  
福井県立産業文化図書館：高橋寅一  
宮崎町ふるさと陶芸館：品山静子  
福島県鹿島町歴史民俗資料館：佐藤友之
5. 本遺跡より出土した金属製品の保存処理については、東北歴史資料館 梅村聖一氏の協力をいただいた。
6. 調査・整備参加者：石川俊英、伊藤とも子、伊藤ゆう子、遠藤英子、遠藤恒春、及川元子、小国清、  
勝又くに子、加藤きわ子、加藤次男、荒野竹二郎、今野親夫、今野はな子、斎田彌、  
齊藤富士子、鈴木よみ子、高橋吉雄、高橋正、中塙栄子、木谷京子、三浦真太郎、  
三輪喜子、門馬忠雄、山田盛、渡辺洋  
宮城県河南高等学校人文科学部
7. 上記の色附表記については、『新版標準上色帳』7冊(小川・竹原：1987.1、日本色研事業株式会社)に準拠し、  
上件以外は昭和14財政会法の基準を参考にした。
8. 本草の執筆・編集は、河南町教育委員会社会教育部 上事 中野裕平が担当した。
9. 掘出した遺物は、全て河南町教育委員会が保管している。

# 目 次

発刊の辞	
例 言	
目 次	
I. 遺跡の位置と環境	1
1. 遺跡の位置と地理的環境	1
2. 遺跡の歴史的環境	1
II. 調査経過	3
1. 調査に至る経過	5
2. 調査の方法と経過	7
III. 基本層序	10
IV. 検出された遺構と出土遺物	11
1. 住居跡	11
2. 積穴遺構	17
3. 単戸跡	24
4. 土 墓	26
5. 烧土遺構	30
6. 谷 跡	33
7. その他の遺構と出土遺物	38
V. 察察とまとめ	44
1. 遺物と遺構	44
2. まとめ	51
引用・参考文献	52
写 真 図 版	54

## I. 遺跡の位置と環境

### 1. 遺跡の位置と地理的環境

群田遺跡は、宮城県桃生郡河南町北村字群田地内に所在し、JR石巻線前谷地駅の南方約6kmにある。遺跡の所在する河南町は面積69.33km<sup>2</sup>、人口18,441人(平成4年12月31日現在)の町で、宮城県の東部に位置し、石巻市の北西、矢本町の北方に隣接する。旧北上川は町の北部で江合川に合流し、町の北部及び東部を区画しながら石巻湾に注いでいる。

東に標高60~90mの通称須江丘陵、西に竜岳丘陵からつづく標高70~170mの通称旭山丘陵、北に最高所173mの和潤山とこれに連なる丘陵を配している。町の中央部には低地があり、江戸時代には用水確保のため広瀬沼が造られたが、大正10年から昭和3年にかけて干拓され水田地帯となっている。

旭山丘陵は、旭山塊曲と大塩背斜からなり、173.8mの旭山を最高所とする。丘陵の西側半分を構成する大塩背斜の一画に、本遺跡は位置する。現況の大部分は杉や雑木の山林で、他に僅かの畠地や水田からなる。

本遺跡は、細粒砂岩・中～粗粒砂岩・礫岩からなる中新統：三ヶ谷層下部層が基盤をなし、その上に砂岩・シルト岩・礫岩からなる鮮新統：亀岡層・シルト岩・砂質シルト岩からなる同：亀ノ口層、さらに最上部には砂岩・シルト岩・礫岩・凝灰岩からなる同：表沢層の堆積がみられる(石井・柳沢ほか：1982)。

### 2. 遺跡の歴史的環境

町内には、群田遺跡の所在する旭山丘陵や須江丘陵などの丘陵部を中心に、多数の遺跡が分布している。これらの遺跡について、時代別にふれてみたい。

旧石器時代の遺跡は、現在のところ発見されていない。

縄文時代の遺跡は23ヶ所確認されている。この中で、型式名のわかる土器を出土しているのは9遺跡である。桑柄貝塚はカキを主体とした汽水産貝塚であり、前期(上川名直式、大木1式)の遺物を包含する。関ノ入遺跡では、前期(大木2式)、中期(大木8a式)、後期の遺物が出土している。朝日貝塚はヤマトシジミを主体とした汽水産貝塚であり、中期(大木7b、8a、8b式)の遺物を包含する(藤沼・小井川ほか：1989.3)。小幡遺跡からは、中期(大木8、9式)、後期、晩期の遺物が採集されている。須江櫛塚遺跡からは、中期(大木9式)の遺物が出土している(高橋・阿部：1987.3)。宝ヶ峯遺跡は、縄文時代後期の土器型式「宝ヶ峯式」の標式遺跡として、学

史的にも有名である(伊東信雄:1957.3、松本彦七郎:1919.5、1919.9)。ここでは中期、後期(南境式、宝ヶ峯式、金剛寺式)、晚期(大洞B、C式、C1式)の遺物が出土している。俵庭遺跡からは、後期(南境式)の遺物が採集されている。代官山遺跡からも後期(南境式)の遺物が出土している。大田沢遺跡からは、晚期(大洞B C式)の遺物が採集されている。他に前山遺跡、前山C遺跡、箱清水寺脇遺跡等があり、その多くは、旭山丘陵の麓部で平坦地に接する縁辺や沢をやや入った所に広がる平坦部や緩斜面に立地している。しかし、その性格は、貝塚以外の多くは不明といわざるをえない。

弥生時代の遺跡は2ヶ所確認されている。木施又遺跡では旧北上川の河床から中期(天泉式)の遺物が採集されている。俵庭遺跡では土器は採集されていないが、アメリカ式石鏃が採集されている。

古墳時代の遺跡は7ヶ所確認されている。須江鶴塚遺跡では前期(埴輪式期)の住居跡が7軒検出されている。いずれも方形を基調とするもので、丘陵尾根上の平坦面に立地している。関ノ入遺跡でも前期(塙釜式期)の住居跡が1軒検出されている。新田A遺跡では前期(塙釜式)の土器が採集されている。鷺の巣遺跡でも前期(塙釜式)の上器が採集されている。後期では、代官山横穴古墳群の存在が確認されている。他に群田遺跡、高森山遺跡がある。

奈良・平安時代の遺跡は23ヶ所確認されている。群田遺跡では、平安時代前半の住居跡3軒、豊穴遺構7基が検出されている。須江丘陵では、丘陵の北から南まで窯跡が分布している。昭和62年度から調査が行われている関ノ入遺跡では、奈良時代と平安時代前半の豊穴住居跡42軒(国分寺下層式期13軒、表杉ノ入式期21軒、不明9軒)、9世紀初頭から10世紀前半にかけての窯跡27基、粘土採掘坑跡6基などが検出されている。また、昭和61年度に調査された須江鶴塚遺跡からは、奈良時代後半から平安時代初期にかけての住居跡9軒、9世紀後半から10世紀前半にかけての窯跡6基が検出されている。須江瓦山窯跡には奈良・平安時代の丸や須恵器を生産した窯跡群がある。丸の一部は、牡鹿郡衙あるいは牡鹿櫛跡と推定される矢本町赤井遺跡に供給されている(三宅・進藤・茂木:1987.3)。平成3年度の調査では土壙29基、焼土遺構1基が検出されている。土壙の中には、粘土採掘坑跡と推定されるものが11基、須恵器を横位に埋設したものが1基であった。平成3年度に調査された代官山遺跡からは、8世紀中葉~後半頃と10世紀前半の窯跡、8世紀末~9世紀初頭頃の住居跡1軒が検出されている(平成3年度宮城県発掘調査遺跡発表会資料:1991.12、第18回古代城柵官衙遺跡検討会資料:1992.2)。太田沢遺跡、前山C遺跡では、9世紀代の土師器が採集されている。他に小崎遺跡、細田遺跡等がある。

中世以降になると、旭山や須江の丘陵上など14箇所に城館が築造されている。長者館跡(長者平遺跡)は、金亮古次の仮屋敷跡(寛政期には小島嘉右衛門の隠屋敷跡とも言われる)の言い伝えがある。鶴塚遺跡(須江鶴塚遺跡)は、古代の「中山櫛跡」に擬定されたこともあり(清水東四郎:

No	遺跡名	種別	時代	No	遺跡名	種別	時代
1	須江塚原遺跡 (蘇原塚跡)	集落跡 古墳、 奈良・平安、中世	縄文(中)、古墳、 奈良・平安、中世	25	前山遺跡	包含地	縄文、奈良・平安
2	須江瓦山遺跡	塚跡	奈良・平安	26	黒沢A遺跡	包含地	縄文、古代
3	池袋田遺跡	包含地		27	黒沢B遺跡	包含地	縄文、古代
4	広瀬沼遺跡	包含地		28	猪瀬水A遺跡	包含地	縄文(後)、古代
5	宝珠峯遺跡 貝塚	包含地 貝塚	縄文(中～晚)、 奈良・平安	29	猪瀬水B遺跡	包含地	縄文、古代
6	朝日貝塚	貝塚	縄文(中)	30	猪瀬水寺跡遺跡	包含地	縄文
7	本龜又遺跡	包含地	弥生	31	小友遺跡	包含地	古代
8	柔柄貝塚	貝塚	縄文(前)	32	高森山遺跡	包含地	古墳、古代
9	堺野田城跡 (塩浜田館)	城館	中世	33	大沢A遺跡	包含地	縄文、古代
10	宿屋敷跡	城館	中世	34	大沢B遺跡	包含地	縄文
11	要寄館跡 (原山館)	城館	中世	35	大沢C遺跡	包含地	縄文
12	武田第跡 (武田尾敷)	城館	中世、近世	36	夷田館跡	城館	近世
13	柏木館跡	城館		37	代官山遺跡	包含地	縄文(後)、 奈良・平安
14	小崎館跡	城館	近世	38	桑柄遺跡	包含地	古代
15	草田館跡 (草田遺跡)	城館 包含地	縄文、中世	39	新田A遺跡	包含地	古墳、古代
16	宮多村館跡 (高地谷館)	城館	中世	40	新田B遺跡	包含地	古代
17	吉木館跡 (林光館)	城館	中世	41	代官山横穴古墳群	横穴古墳	古墳、古代
18	新庄館跡 (狗立館)	城館	中世	42	群田遺跡	集落跡	縄文、古墳、奈良・平安、江戸
19	駒場館跡	城館	中世	43	奈良山遺跡	塚跡	古代、江戸
20	俵塚遺跡	包含地	縄文(中・後)、 弥生、古代	44	御塙蔵場跡	塚跡	近世
21	長者館跡 (長者平塚跡)	城館 包含地	縄文、古代、中世	45	細田遺跡	包含地	縄文、古代
22	関ノ入遺跡	集落跡 塚跡	縄文(前～後)、古墳、 奈良・平安、中世	46	鷺の巣遺跡	包含地	古墳
23	小崎遺跡	包含地	縄文(中～晚)、 奈良・平安	47	前山B遺跡	包含地	縄文、古代
24	大田沢遺跡	包含地	縄文(晚)、古代	48	前山C遺跡	集落跡	縄文(後・晚)、 奈良・平安

第1表 遺跡地名表



第1図 河南町の滝跡

1924.12、鈴木省三：1924.12)、「仙台領内古城書上」によれば、東西20間、南北15間の規模で、館主は須藤勘解由左衛門であるとされている(仙台叢書：1971)。塙野田城跡は東西21間、南北27間、城主は須藤勘解由左衛門(一説には矢代斎三郎)と伝えられている(「安永風土記」)。夷田館跡は、鳴西氏家臣夷田氏の居館と伝えられている(「風土記御用書上」)。多くの城跡跡は年代、鉢土共に不明である。

また、鹿又地区、須江地区を中心として、町内には、現在のところ88基の板碑が確認されている。紀年銘の判読できるものの中で最古は弘安元年(1278年)、最新は文明10年(1478年)のものである(佐藤雄一：1986.11)。残念ながら、多くの板碑は原位置を保っていない。中には、闇ノ入遺跡出土の板碑のように、木炭窯の焚口等を強化するために折って側壁に貼り付けて使用されていた例もある。

江戸時代になると、新田開発や旧北上川や江合川の改修工事が行われ、舟運が盛んになる。平成2年度に調査された御廻歳場跡では、基壇状遺構(上面：約400m<sup>2</sup>)が検出されている(佐藤敏幸：1991.3)。他に一生塚跡、屋敷跡と考えられる群田遺跡、陶器を生産したと考えられる余良山遺跡がある。

註1. 採集された遺物の一部は、町役場が保管している。

## II. 調査経過

### 1. 調査に至る経過

石巻地区広域行政事務組合衛生センター(以下「衛生センター」)は、石巻地区1市9町の屎尿処理を行う施設である。近年、施設の老朽化がすすんで、建て替えが望まれていた。そこで、三陸縦貫自動車道石巻道路へのアクセス道路整設計画によって、道路が衛生センター敷地内的一部分を通過することになり、現敷地内の建て替えが困難となった。そこで、平成元年2月、組合議会は衛生センターの移転を決め、河南町と河北町に分散配置を決定した。

これを受けて、同年7月、河南町議会議員全員協議会は北村地区に設置を決定し、北村字群田地内にその用地を求めた。この地は周知の埋蔵文化財包蔵地であったが、当時「矢返遺跡」という名称であったため、遺跡でないものとの誤解を受けることになった。このような錯誤を防ぐため、平成3年10月、河南町教育委員会は、「矢返遺跡」から「群田遺跡」へ名称を変更した。同年同月、河南町教育委員会は、石巻地区広域行政事務組合と協議に入った。同月、県文化財保護課の指導と協力を得て、衛生センター予定地内の踏査を行い、数地点で遺物を採集した。

しかしながら、遺跡の範囲、性格が十分に把握できる状況ではなかったため、同年11月、事

前調査に先駆けて確認調査を実施した。その成果を踏まえ、平成4年3月、河南町教育委員会は、記録保存を目的とする発掘調査を実施するための活動を開始した。

## 2. 調査の方法と経過

今回の発掘調査は、分散配置する衛生センターの予定地(以下「調査区」)が『宮城県遺跡地図』(宮城県教育委員会:1988.1)登載の周知の埋蔵文化財包蔵地である群田遺跡の範囲内に所在するため、遺跡の立地する丘陵頂部平坦面及び斜面を対象として実施したものである。

確認調査は、基本的に東西軸または南北軸に則った3m幅のトレンチを、3mの間隔をもって設定して、重機で表土除去を行い、遺構を確認した。

これによって、調査区内の遺構の分布が把握され、北側頂部平坦面及び南斜面、西斜面、南西部平坦面及び緩斜面に遺構が点在することが確認された。また、グリッドの設定、表記については、国家座標のX軸、Y軸に基づいて、確認調査の原点を基に3m単位で設定し、東西方向をアルファベット、南北方向をアラビア数字で表し、両者の組合せでグリッド名を表記した。

事前調査は調査区北側西斜面から開始し、頂部平坦面、南斜面、南西部平坦面と進めていった。効率的に調査を進めるため、遺構の点在する箇所の周辺の表土を地形を考慮しながら、重機を用いて除去し、遺構を確認した。その際、南西部平坦面につづく緩斜面の遺構の一部が南



第2図 調査区と周辺の地形



### 第3回 番田道洋 漢物語

西部平坦面を構成する盛土に覆われていることが確認され、南西部平坦面の調査終了後、改めて南西部平坦面を構成する盛土を重機を用いて除去し、遺構を確認した。その結果、竪穴住居跡3軒、竪穴遺構7基、井戸跡1基、土壙9基、焼土遺構7基、溝跡4条、整地面、ピット群を検出した。

検出した遺構の実測図は、基本的に<sup>1/20</sup>図で作成し、3号・4号溝跡については<sup>1/10</sup>図を併用して作成した。

発掘調査は、平成3年11月27日から確認調査を開始し、同年12月27日に一時中断した。平成4年2月24日に再開し、確認調査及び一部事前調査を実施した。同年3月31日に再度一時中断し、同年4月7日に事前調査を再開した。遺物の水洗等、現場でも行える整理作業を併行しながら、同年8月28日までに遺構の平面図・断面図、写真、遺構のダメ押し及び文章記録等の記録化を全て完了し、調査を終了した。

### III. 基本層序

調査区は大きく丘陵頂部平坦面、急斜面、調査区南西部に広がる平坦面、緩斜面に分けられる。これらの各面の層序には多少の相違はあるものの、基本的には同一の層準を示している。  
〔I層〕褐(10YR 4/4)色のシルトである。本遺跡の表土で、全域に分布する。粘性はなく、しまりに欠ける。層厚は、丘陵頂部平坦面では5~20cm、緩斜面、急斜面では10~30cmである。現況の大部分は山林である。少量の陶磁器、金属製品を含む。

〔II層〕にぶい黄褐(10YR 5/2~10YR 5/3)色、暗褐(10YR 5/6~10YR 5/7)、費褐(10YR 5/6)色、褐(10YR 5/4)色の混合した層で、シルトと砂質シルトからなる。盛土によって整地された面で、調査区南西部平坦面を形成する。層厚は、最大深120cmである。少量の陶磁器、金属製品、石製品を含む。

〔III層〕暗褐(10YR 5/6~10YR 5/7)色~黒褐(10YR 5/6~10YR 5/8)色のシルトである。調査区全域に分布し、層厚は丘陵頂部平坦面では10~20cm、急斜面では10cm~25cm、緩斜面では10~40cmである。一部の遺構が、本層上面で確認されている。少量の土師器、須恵器、上製品、金属製品を含む。

〔IV層〕黄褐(10YR 5/6)色の砂質シルトである。本調査区の地表で、調査区全域に分布する。ほとんどの遺構は、本層上面で確認されている。

## IV. 検出された遺構と出土遺物

群団遺跡の発掘調査によって竪穴住居跡3軒、竪穴遺構7基、井戸跡1基、土壙9基、焼土遺構7基、溝跡4条・整地面、ピット群が検出された。これらの遺構に伴って、土器や土製品、陶器、磁器、石製品、金属製品などの遺物が出土した。

### 1. 住居跡

竪穴住居跡は、調査区を南北に二分する沢に南面した斜面から1軒、南西部の緩斜面から2軒の計3軒検出した。

#### (1) 1号住居跡

【確認面】基本層序N層から確認された。

【壁裏・増改築】認められない。

【規模・平面形】東隅を除いた北東壁及び北西壁の一部が検出された。その他の部分は検出されなかった。残存する北東壁、北西壁の幅はそれぞれ6.67m、2.61mである。長方形または正方形を基調とするものと推定される。

【竪穴層位】11層に大別される。いずれも自然堆積層である。この中で、層N-9は灰白色火山灰層である。

【壁】基本層序N層からなる。最も保存の良い北東壁では43cmの高さで残存している。床面から急な角度で立ち上がる。

【床面】基本層序N層を床面とする。残存する南東側の一画が、他の部分と比べて5~10cm高い。全体的にやや硬い。床面レベルは南東隅が最も高く、北西隅に向かうにつれてレベルを減じる。

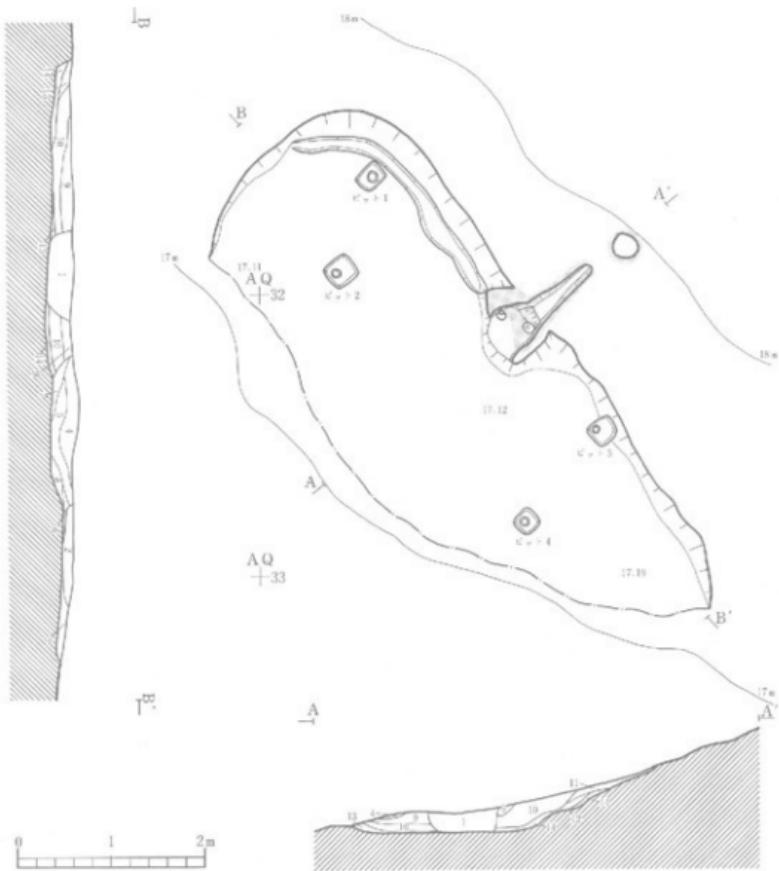
【柱穴】4個のピットが検出された。隅丸長方形の掘り方を有し、全て柱穴である。

【カマド】北東隅に位置しており、燃焼部と煙道部が検出

された。燃焼部は奥行き0.56

層	土色	土性	構造	特徴	堆積範囲
1 織物1SYR <sup>2</sup>	シルク	少量の炭化物を含む灰褐色。	少量の堆積土を含む焼土。	焼成物を含む。	無
2 灰N-9YR <sup>2</sup>	シルク	少量の炭化物を含む。	無	無	無
3 灰N-9YR <sup>2</sup>	シルク	少量の炭化物。	山土を含む。	無	無
4 灰N-9YR <sup>2</sup>	シルク	少量の灰白色。	山土を含む。	無	無
5 乾燥1SYR <sup>2</sup>	乾燥シルク	少量の炭化物。	山土を含む。	無	無
6 灰10YR <sup>2</sup>	シルク	少量の炭化物を含む。	無	無	無
7 利10YR <sup>2</sup>	砂質シルク	少量の9.5YR <sup>2</sup> の岩を含む。	砂質土を含む。	地山に含む。	無
8 灰壤10YR <sup>2</sup>	砂質シルク	堆積土。	少量の炭化物を含む。	無	無
9 N-9-1-3SYR <sup>2</sup>	シルク	少量の灰褐色。	少量の10YR <sup>2</sup> シルトを含む。	焼成物。	無
10 灰壤10YR <sup>2</sup>	シルク	少量の炭化物を含む。	灰土を含む。	無	無
11 灰10YR <sup>2</sup>	砂質シルク	少量の炭化物。	灰土を含む。	無	無
12 清10YR <sup>2</sup>	砂質シルク	少量の灰白色。	少量の炭化物。	無	無
13 灰10YR <sup>2</sup>	シルク	少量の炭化物。	無。	無	無
14 灰10YR <sup>2</sup>	シルク	少量の炭化物を含む。	無。	無	無

第2表 1号住居跡土層記録表



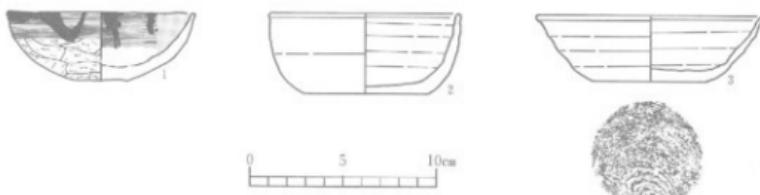
#### 第4図 1号住居跡

m、幅0.80mである。煙道部は長さ1.33m、幅0.23mで、底面は先端に近づくにつれて高くなる。先端からは煙出しピットが検出された。堆積土は2層に細分され、下層には多量の灰白色火山灰が混入している。

〔周溝〕北東壁及び北西壁の一部から検出された。他の部分からは検出されず、検出状況からみて壁沿いに一周するものとは推定されない。幅18cm、深さ11cmで、断面は「U」形である。底面レベルは東隅が最も高く、北西隅に向かうにつれてレベルを減じる。

〔出土遺物〕 カマド底面(層No.12下)、床面(層No.13下、14下)を中心に、土師器壺及び須恵器壺

の一括資料が出土した(第5図)。



第5図 1号住居跡出土遺物

編	地質	層位	外 形	内 面	底 部	口径・底径・深さ(cm)	記 号
1	土頭層	末	口へ狭いロコナゲ	内面：タケノコ	ハフナゲ	9.8 × 6	10.0・2.8・3.6 透明川。回取2-2-1
2	土頭層	タケノコ層	ロコナゲ	内面：タケノコ	ハフナゲ	10.2・6.5・4.3	回取2-2-2
3	黒泥層	タケノコ層	ロコナゲ	内面：タケノコ	ハフナゲ	12.2・6.0・3.5	回取2-2-3

第3表 1号住居跡出土遺物

## (2) 2号住居跡

〔確認面〕基本層序IV層から確認された。

〔重複・増改築〕1号溝跡に切られている。

〔規模・平面形〕北東壁の全部及び北西壁と南東壁の一部が検出された。その他の部分は検出されなかった。北東壁は幅4.00m、残存する北西壁及び南東壁の幅はそれぞれ2.83m、2.14mである。東西4m前後、南北4.00mの正方形を基調とするものと推定される。

〔堅穴層位〕2層に大別される。いずれも自然堆積層である。

〔壁〕基本層序IV層からなる。最も保存の良い北東壁では32cmの高さで残存している。床面から急な角度で立ち上がる。

〔床面〕基本層序IV層を床面とする。凹凸はない。西側が搅乱及び自然の削平を受けている。

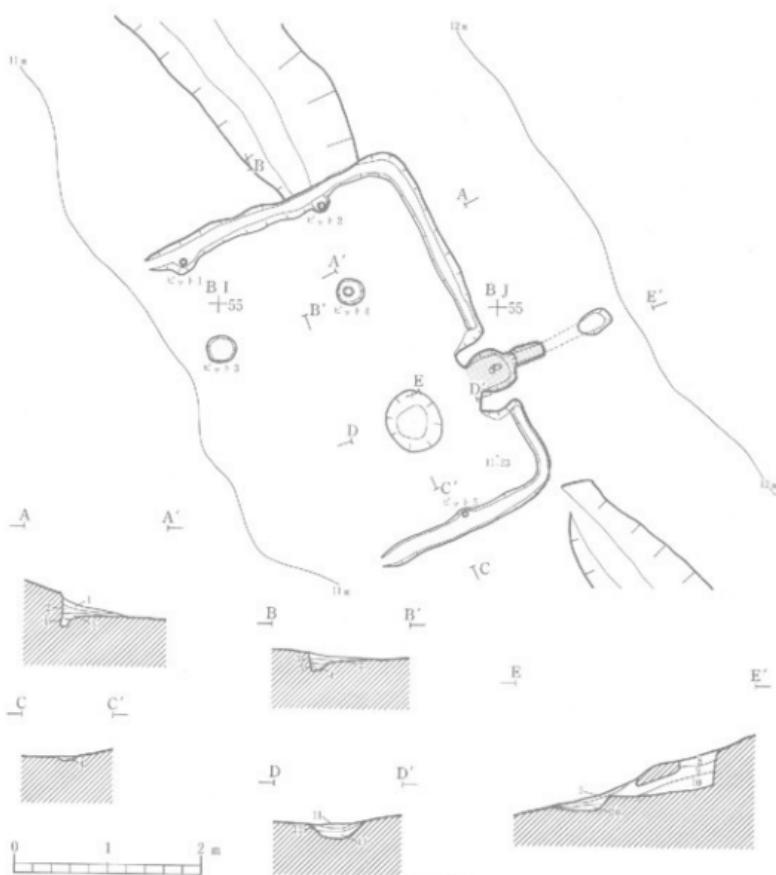
床面レベルは北東隅が最も

編	地質	土性	特	記	堆積物
1	褐色YR5/1	シルト	少量の炭化物。泥土、粘土を保有に含。		豊富1層
2	にふく黄褐色YR5/2	シルト	少量の炭化物。泥土を保有。堆山土を保有～堆積に含。	× 2層	
3	褐色YR5/2	シルト	少量の鐵物。泥土を保有に含。		豊富1
4	黒褐色10YR5/2	シルト			× 2
5	褐色5YR5/2	シルト	少量の炭化物。泥土を保有に含。		カマド1
6	褐色5YR5/2	シルト	少量の炭化物を保有。泥土を保有～堆積に含。	× 2	
7	赤褐色5YR5/2	粘土質シルト	少量の炭化物を保有。泥土を保有～堆積に含。	× 2	
8	にふく黄褐色10YR5/2	砂質シルト	少量の炭化物。泥土を保有に含。		豊富1
9	黒褐色10YR5/2	シルト	少量の炭化物。泥土を保有に含。	× 2	
10	黒褐色10YR5/2	シルト	少量の鐵物を保有。炭化物、鐵土、堆山土を保有に含。	× 3	
11	黒褐色10YR5/2	シルト	少量の炭化物を保有。鐵物、堆山土を保有～堆積に含。	好 F 1	
12	黒褐色5YR5/2	砂質シルト	少量の炭化物を保有。泥土を保有に含。	× 2	
13	褐色5YR5/2	シルト	少量の炭化物を保有。泥土を保有～堆積に含。	× 2	

〔カマド〕北東壁に位置し

ており、燃焼部と煙道部が

第4表 2号住居跡土層記表



第6図 2号住居跡

検出された。燃焼部は奥行き0.53m、幅0.77mである。煙道部は基本層序Ⅶ層をトンネル状に構築されている。長さ1.11m、幅0.19mで、底面は先端に近くにつれて高くなる。先端部からは煙出しピットが検出された。

〔貯蔵穴状ピット〕1個検出された。長軸0.68m、短軸0.58mの不整円形を呈する。堆積土は3層(層N11、12、13)からなる。

〔周溝〕壁と同様に全部は検出されなかったが、壁沿いに一周するものと推定される。幅23cm、深さ10cmで断面は「U」形である。底面レベルは北東側が最も高く、北西隅に向かうにつれてレベルを減じる。

〔出土遺物〕 カマド底面、床面を中心に赤焼き土器壺、土節器  
甕が出土したが、固化できるものは少なかった。(第7図)。



### (3) 3号住居跡

〔確認面〕 基本層序Ⅲ層及びⅣ層から確認された。

〔重複・増改築〕 3号竪穴遺構に切られ、5個のピットが重  
複している。

〔規模・平面形〕 北東壁の全部及び北西壁と南東壁の一部が 第7図 2号住居跡出土遺物

検出された。その他の部分は検出

№	種	表	層	外	内	壁	口徑	基盤	標
1	赤焼き土器壺	カマド底面	ヨコヨリ	ヨコヨリ	ヨコヨリ	ヨコヨリ	10.6	3.6	3.4

されなかった。北東壁の幅4.77m、

残存する北西壁と南東壁の幅は、

それぞれ4.40m、2.18mである。東西4.5m前後、南北4.77mのほぼ正方形を基調とするものと推定される。

〔竪穴層位〕 3層に大別される。いずれも自然堆積層である。この中で、層No.2は少量の灰白色火山灰を混入している。

〔壁〕 基本層序Ⅲ層及びⅣ層からなる。最も保存の良い北東壁では46cmの高さで残存し

ている。床面から急な角度で立ち上がる。

〔床面〕 基本層序Ⅲ層及びⅣ層を床面とする。凹凸ではなく、貼床が施されている。床面レベルは北東隅が最も高く、南西隅に向かうにつれてレベルを減じる。

〔柱穴〕 12個のピットが検出された。ピット2、5、7、9、10は柱穴である。この中で、ピット5、10の柱穴部分には灰白色火山灰が混入している。ピット1、8、11は側柱穴である。ピット3、12は掘り方に灰白色火山灰を混入しており、本遺構の柱穴ではない。ピット4、6は柱穴ではない。

〔カマド〕 北東壁に位置しており、燃焼部と煙道部が検出された。燃焼部は奥行き0.61m、幅0.90mである。煙道部は基本層序Ⅳ層をトンネル状に構築されている。長さ1.11m、幅0.26m

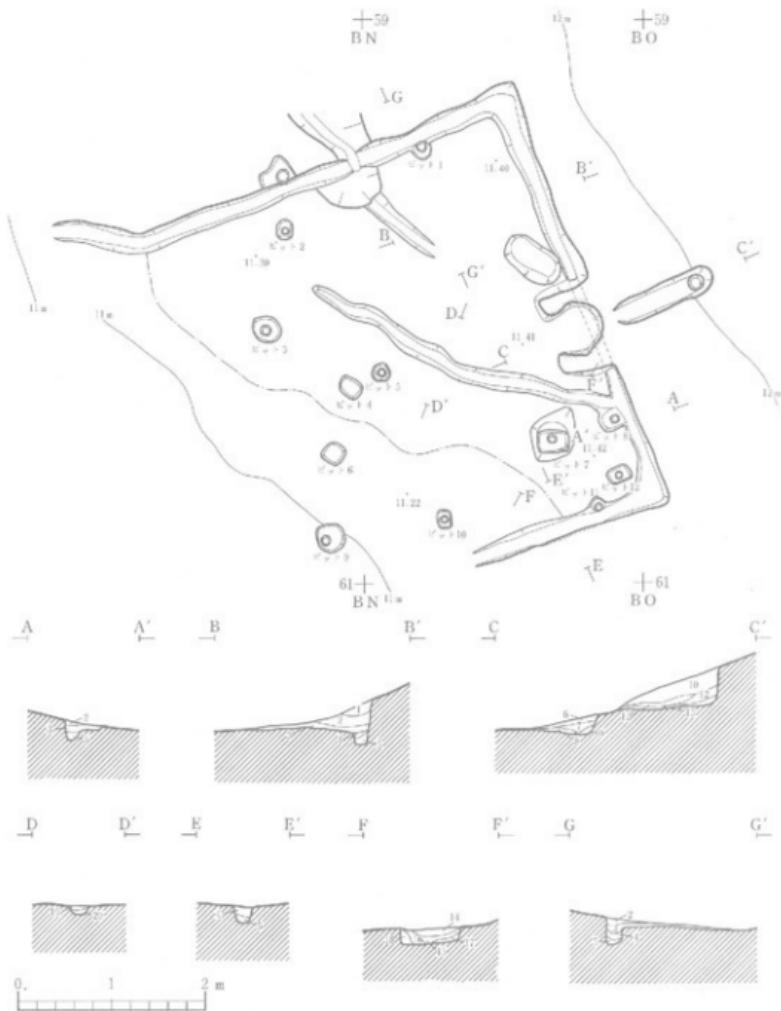


0 5 10cm

第5表 2号住居跡出土遺物

№	種	表	土性	層	石	地質範囲
1	赤焼きYR <sub>1</sub>	シ	シ	少量の地山土を粘土に含。		粘土1層
2	赤焼きYR <sub>2</sub>	シ	シ	少量の灰白色火山灰を粘土、灰化物、地山土を粘土に含。	+	2層
3	赤焼きYR <sub>3</sub>	シ	シ	少量の灰化物、地山土を粘土に含。	+	3層
4	黄褐色YR <sub>1</sub>	シ	シ	少量の灰化物を粘土に含。		粘土1層
5	にじく黄褐色YR <sub>1</sub>	シ	シ	少量の灰化物、地山土を粘土に含。	+	2層
6	黄褐色YR <sub>1</sub>	シ	シ	少量の灰化物、地山土を粘土に含。	カバ1	
7	黄褐色YR <sub>1</sub>	シ	シ	少量の灰化物、地山土を粘土に含。	+	2層
8	にじく黄褐色YR <sub>1</sub>	シ	シ	少量の灰化物、地山土を粘土に含。	+	3層
9	赤褐色YR <sub>1</sub>	シ	シ	少量の灰化物、地山土を粘土に含。	+	4層
10	赤褐色YR <sub>2</sub>	シ	シ	少量の灰化物、地山土を粘土に含。		粘土1層
11	赤褐色YR <sub>3</sub>	シ	シ	少量の灰化物を粘土に含。	+	2層
12	にじく黄褐色YR <sub>1</sub>	シ	シ	少量の灰化物、地山土を粘土に含。	+	3層
13	黄褐色YR <sub>1</sub>	シ	シ	少量の灰化物、地山土を粘土に含。	+	4層
14	黄褐色YR <sub>2</sub>	シ	シ	少量の灰化物、地山土を粘土に含。	BP 1	
15	にじく黄褐色YR <sub>1</sub>	シ	シ	少量の灰化物を粘土に含。	+	2層
16	黄褐色YR <sub>1</sub>	シ	シ	少量の灰化物を粘土に含。	+	3層
17	黄褐色YR <sub>2</sub>	シ	シ	少量の灰化物YR <sub>1</sub> シルトを粘～塊状、灰化物を粘土に含。	+	4層
18	黄褐色YR <sub>3</sub>	シ	シ	少量の灰白色火山灰を粘土に含。	+	3層
19	にじく黄褐色YR <sub>1</sub>	シ	シ	少量の灰白色火山灰を粘土に含。	四透1	
20	にじく黄褐色YR <sub>1</sub>	シ	シ	少量の灰化物を粘土に含。	+	2層

第6表 3号住居跡土層註記表



で、底面は先端に近づくにつれて高くなる。先端からは埋出しピットが検出された。

〔貯藏穴状ピット〕1個検出された。長軸0.67m、短軸0.48mの不整円形を呈する。堆積土は5層(層No14~18)からなり、最下層には少量の灰白色火山灰が混入している。底面からはピット7が検出された。

〔周溝〕壁と同様に全部は検出されなかつたが、壁沿いに一層するものと推定される。幅25cm、深さ18cmで、断面は「U」形である。底面レベルは南東隅が最も高く、北西隅に向かうにつれてレベルを減じる。なお、カマドの下はトネル状に構築してある。

〔その他の施設〕周溝の北西隅から住居外へ向かって延びる溝が検出された。幅26cm、深さ11cmで、断面は「U」形である。住居を離れるにつれてレベルを減じる。また、カマドと住居南東隅の間から床面を北西に向かって延びる溝が検出された。幅23cm、深さ10cmで、断面は「U」形である。中間部が最も低く、

両端に向かうにつれてレベル

を増す。堆積土は2層(層No.19、20)からなり、上層には少量の  
灰白色火山灰が混入している。

〔出土遺物〕カマド、貯蔵穴  
状ピットを中心に土器簡壺、  
杯の破片が出土したが、図化  
できるものはなかった。

## 2. 壁穴遺構

壁穴遺構は、調査区南西部  
の緩斜面から7基検出した。

### (1) 1号壁穴遺構

〔確認面〕基本層序IV層から  
確認された。

〔重複・増改築〕1個のピッ  
トが重複している。

〔規模・平面形〕北東壁及び

南東壁の一部以外は削平を受けており、全体の  
規模は不明だが、方形を基調とするものと推定  
される。残存する北東壁及び南東壁の幅はそれ  
ぞれ2.67m、1.43mである。

〔壁穴層位〕2層に分けられる。いずれも自然



第9図 1号・2号壁穴遺構

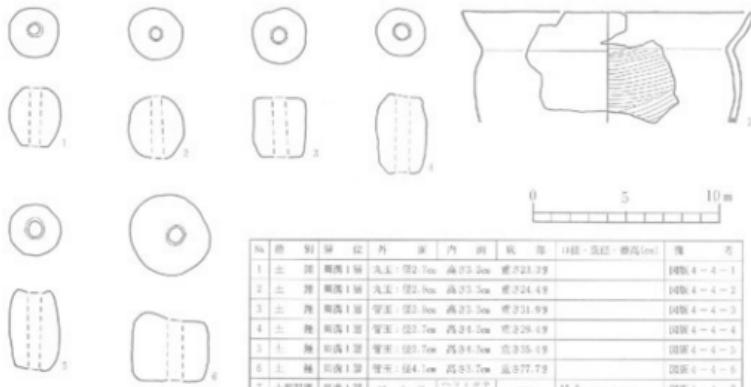
### 1号壁穴遺構

No.	土色	土性	鉢	号	主要範囲
1	黒褐色(YR5/2)	シルト	少量の炭化物を確認。		溝底1層
2	黒褐色(YR5/2)	粘土質シルト	少量の炭化物、地土土を軽微に含む。		2号

### 2号壁穴遺構

No.	土色	土性	鉢	号	主要範囲
1	灰褐色(YR5/2)	シルト	少量の炭化物、地土土を軽微に含む。		溝底1層

第7表 1号・2号壁穴遺構土層記表



第10図 1号窓穴遺構出土遺物

第8表 1号窓穴遺構出土遺物

堆積層である。

〔壁〕基本層序IV層からなる。最も保存の良い北東壁では13cmの高さで残存している。

〔床面〕基本層序V層を床面とする。凹凸はなく、全体的にやや硬い。床面レベルは南東隅が最も高く、北西隅に向かうにつれてレベルを減じる。

〔柱穴〕6個のピットが検出された。ピット3、5は柱穴である。ピット1、2、4、6は本遺構の柱穴ではない。

〔周溝〕壁と同様に全部は検出されなかったが、壁沿いに一周するものと推定される。幅25cm、深さ9cmで、断面は「U」形である。底面レベルは北東側が最も高く、南西隅に向かうにつれてレベルを減じる。

〔出土遺物〕周溝から土師器甕、土錐が出土した(第10図)。

## (2) 2号窓穴遺構

〔確認面〕基本層序IV層から確認された。

〔重複・増改築〕2個のピットが重複している。

〔規模・平面形〕北東側の周溝の一部以外は削平を受けており、全体の規模は不明だが、方形を基調とするものと推定される。残存する周溝の長さは2.80mである。

〔窓穴層位〕単層で自然堆積層である。

〔壁〕削平を受けており、確認されなかった。

〔床面〕基本層序V層を床面とする。削平を受けており、使用時の面は損われている。

〔柱穴〕6個のピットが検出された。ピット1、4は柱穴である。ピット2、3、5、6は柱

穴ではない。

〔幾溝〕 北東壁の一部が検出された。壁と同様に全部は検出されなかつたが、壁沿いに一列するものと推定される。幅27cm、深さ6cmで、断面は「U」形である。底面レベルは北西隅が最も高く、南東隅に向かうにつれてレベルを減じる。

〔出土遺物〕 周溝から土師器類の破片が出土したが、固化できるものはなかつた。

### (3) 3号壁穴遺構

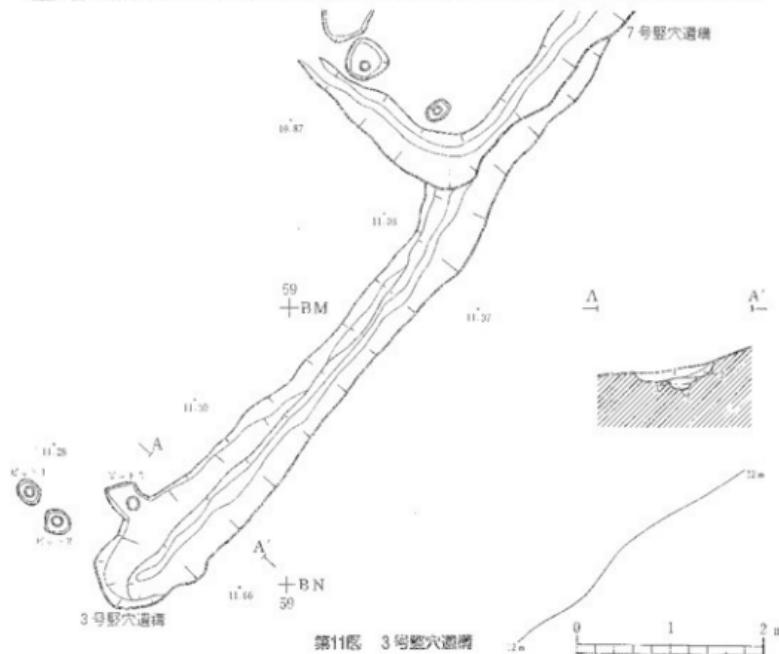
〔確認面〕 基本層序Ⅶ層から確認された。

〔複複・増改築〕 3号住居跡を切り、7号壁穴遺構に切られている。

〔規模・平面形〕 南東壁の一部が検出された。その他の部分は検出されなかつた。残存する南東壁の幅は8.11mである。全体の規模は不明だが、長方形または正方形を基調とするものと推定される。

〔壁穴層位〕 2層に大別される。いずれも自然堆積層である。

〔號〕 基本層序Ⅶ層からなる。最も保存の良い南東壁では22cmの高さで残存している。床面か



ら急な角度で立ち上がる。

〔床面〕基本層序Ⅲ層を床面とする。周溝付近にくぼみがあり、全体的にやや硬い。残存する周溝付近を除いては大きく削平を受け、使用時の面は損われている。床面レベルは南東隅が最も高く、西隅に向かうにつれてレベルを減じる。

〔柱穴〕3個のビットが検出された。ビット

1、3は柱穴である。ビット2は木造構の柱穴ではない。

〔周溝〕南東壁の一部から検出され

た。他の部分からは検出されず、壁沿いに一列するものとは推定されない。幅50cm、深さ10cmで、断面は「U」形である。底面レベルは南隅が最も高く、東隅に向かうにつれてレベルを減じる。

〔出土遺物〕堆積土及び床面、周溝から上部器皿及び壺の破片が出土した。炭化できるものは少なかった(第12図)。

#### (4) 4号壁穴遺構

〔確認面〕基本層序Ⅶ層から確認された。

〔重複・増改築〕認められない。

〔規模・平面形〕北東側及び南東側の周溝の一部を除いては削平を受けしており、全体の規模は不明だが、柱穴の位置から、東西3.5m以上、南北9m以上の長方形を基調とするものと推定される。

〔堅穴層位〕2層に細分される。いずれも自然地盤層である。

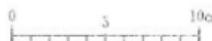
〔壁〕削平を受けており、確認されなかつた。

〔床面〕基本層序Ⅲ層を床面とする。凹凸はなく、全体的にやや硬い。残存する周溝付近を除いては大きく削平を受け、使用時の面は損われている。床面レベルは南東隅が最も高く、北西隅に向かうにつれてレベルを減じる。

〔柱穴〕11個のビットが検出された。ビット1、3、6～9、11は柱穴である。それぞれの柱間の間隔は東西2.3～2.7m、南北2.3～2.8mである。ビット6の西側に組む柱穴は検出されなかつた。掘り方の平面形は、上端では長方形または

No.	柱	柱間	面	特	備考
1	柱頭: YR 3	ノット	少頭の頭化物、丸山二重丸柱に付。		柱穴1名
2	柱頭: YR 3	ノット	少頭の頭化物を認める頭化柱。		× 2名
3	柱頭: YR 3	ノット	少頭の頭化物を認める頭化柱。		柱穴: 4名
4	柱頭: YR 3	ノット	少頭の頭化物、丸山二重丸柱に付。		× 1名

第9表 3号壁穴遺構土層記表



No.	柱	柱間	面	特	備考
1	柱頭: YR 3	ノット	少頭の頭化物を認める頭化柱。		柱穴: 1名

第12図 3号壁穴遺構出土遺物

幅50cm、深さ10cm

No.	柱	柱間	面	特	備考
1	柱頭: YR 3	ノット	少頭の頭化物を認める頭化柱。		柱穴: 1名

第10表 4号壁穴遺構土層記表

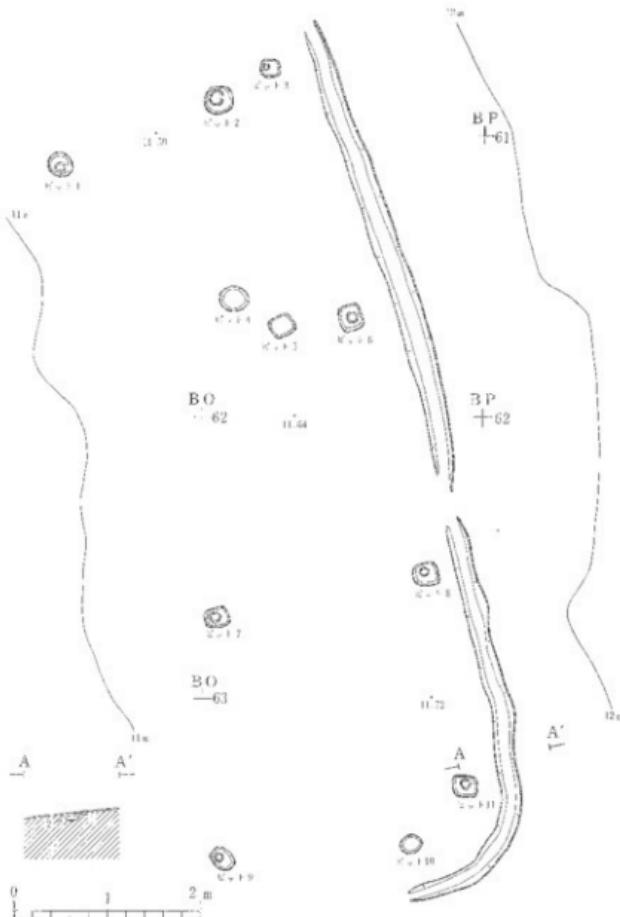
No.	柱	柱間	面	特	備考
1	柱頭: YR 3	ノット	少頭の頭化物を認める頭化柱。		柱穴: 1名
2	柱頭: YR 3	ノット	少頭の頭化物を認める頭化柱。		× 2名

正方形を基調とする。ピット2は掘り方及び位置から本遺構の柱穴ではない。ピット4、5、10は柱穴ではない。

【周溝】北東側及び南東側の一部が検出された。壁と同様に全部は検出されなかつたが、壁沿いに一周するものと推定される。幅32cm、深さ10cmで、断面は「U」形である。底面レベルは北東側が最も高く、南東側に向かうにつれてレベルを減じる。

【出土遺物】遺物は出土しなかつた。

(5) 5号壁穴遺構



第13図 4号壁穴遺構

【確認面】基本層

序V層から確認された。

【壇複・塙改築】周溝がピットに切られている。

【壇複・半壇形】北東側及び南東側の周溝の一部を除いては削平を受けており、全体の規模は不明だが、南北4.5m以上の長方形または正方形を基調とするものと推定される。

【堅穴単位】単層で自然堆積層である。

【縫】削平を受けており、確認されなかつた。

〔床面〕 基本層序Ⅳ層を床面とする。全体的にやや硬い。残存する周溝の付近も含めて大きく削平を受け、使用時の面は損われている。

〔柱穴〕 5個のピットが検出された。ピット1~4は柱穴である。ピット5は本遺構の柱穴ではない。

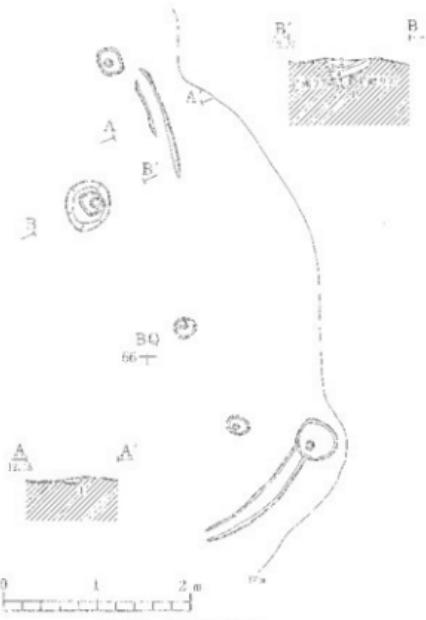
〔防護穴状ピット〕 1個検出された。長軸0.60m、短軸0.49mの椭円形を呈する。堆積土は3層(層No.2、3、4)からなる。

底面からはピット2が検出された。

〔掘溝〕 北東側及び南東側の一帯が検出された。壁と同様に全部は検出されなかったが、壁沿いに一帯するものと推定される。幅22cm、深さ3cmで、断面は「U」形である。底面レベルは北東隅が最も高く、南東隅に向かうにつれてレベルを減じる。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

#### (6) 6号墓穴遺構



第14図 5号柱穴遺構

No.	主な名前	セグメント	性質	考	測量者
1	柱穴10号R12	ノルト	柱の柱頭と柱頭付近	柱頭付近	田島
2	柱穴10号V12	ノルト	柱の柱頭と柱頭付近	柱頭付近	田島
3	柱穴10号Y12	ノルト	柱の柱頭と柱頭付近	柱頭付近	田島
4	柱穴10号Y12	ノルト	柱の柱頭と柱頭付近	柱頭付近	田島

〔確認面〕 基本層序Ⅳ層から確認された。

〔築模・増改築〕 認められない。

〔規模・平面形〕 北西壁及び北東壁の一帯が検出された。その他の部分は検出されなかった。残存する北西壁、北東壁の幅はそれぞれ3.32m、1.85mである。長方形または正方形を基調とするものと推定される。

〔壁面層位〕 5層に細分される。いずれも自然堆積層である。

〔壁〕 基本層序Ⅳ層からなる。最も保存の良い北西壁では19cmの高さで残存している。床面から急な角度で立ち上がる。

〔床面〕 基本層序Ⅳ層を床面とする。凹凸ではなく、全体的にやや硬い。残存する周溝付近を除いては大きく削平を受け、使用時の面は損われている。床面レベルは北東隅が最も高く、南西隅に向かうにつれてレベルを減じる。

【柱穴】1個のピットが検出された。柱穴である。

【周溝】北西側及び北東側の一部が検出された。

壁と同様に全部は検出されなかつたが、壁沿いに一周するものと推定される。幅37cm、深さ18cmで、断面は「U」形である。底面レベルは南東隅が最も高く、北西隅に向かうにつれてレベルを減じる。

【出土遺物】周溝から土器部の破片が出土した。

固化できるものはなかった。

#### (2) 7号竪穴遺構

【確認面】基本層序Ⅲ層から確認された。

【壁様・増改築】3号竪穴遺構を切っている。

【規模・平面形】南東壁の全部及び北東壁と南西壁の一部が検出された。その他の部分は検出されなかつた。南東壁の幅は5.83m、残存する北東壁、南西壁の幅はそれぞれ1.22m、2.28mである。全体の規模は不明だが、長方形または正方形を基調とするものと推定される。

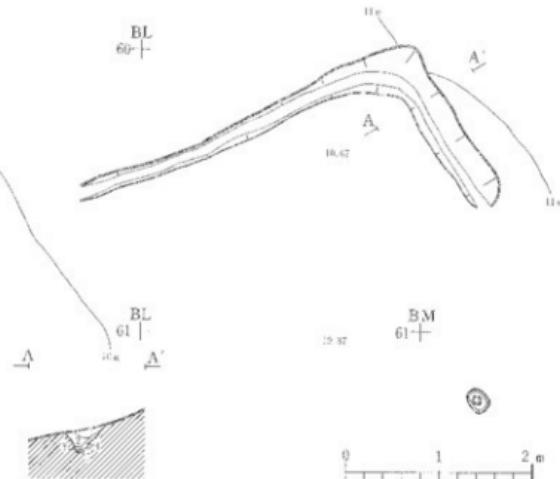
【竪穴層位】3層に細分される。いずれも自然堆積層である。

【壁】草木層序Ⅲ層からなる。最も保存の良い北東壁では17cmの高さで残存している。床面から急な角度で立ち上がる。

【床面】基本層序Ⅲ層を床面とする。多少凹凸があり、全体的にやや硬い。南東壁付近を除いては大きく削平を受け、使用時の面が損われている。床面レベルは南東隅が最も高く、北西隅に向かうにつれてレベルを減じる。

【柱穴】4個のピットが検出された。ピット1、2、4は柱穴である。ピット3は本遺構の柱穴ではない。

【貯蔵穴状ピット】1個検出された。長軸0.64m、短軸0.52mの不整円形を呈する。堆積土は



第15図 5号竪穴遺構

No.	二 床 面 内 容	一 特 性	三 層 構 造	名	堆積物的 的性質
1	土 砂質 YR1方	砂質シルト 少量の砂土を含む。			初期1層
2	砂質 YR1方	砂質シルト 少量の黑色物、砂由来を含む。			+ 2層
3	土 砂質 YR1方	砂質シルト 少量の砂土を含む。			+ 3層
4	泥炭 YR1方	砂質シルト 少量の砂土を含む。			+ 4層
5	砂 YR1方	砂			+ 5層

第12表 6号竪穴遺構土層記載

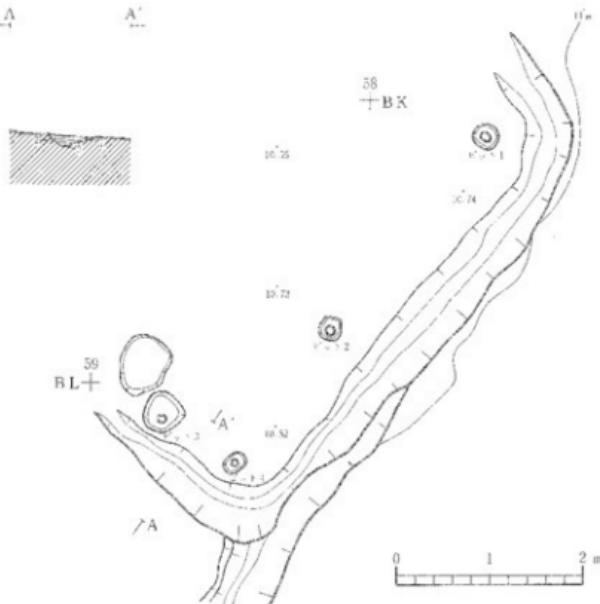
単層(層N-4)である。

【周溝】壁と同様に全部は検出されなかつたが、壁沿いに一周するものと推定される。輪58cm、深さ11cmで、断面は「U」形である。底面レベルは南東隅が最も高く、北西隅に向かうにつれてレベルを減じる。

【出土遺物】周溝、貯蔵穴状ピットから

土器器の破片が出土した。炭化できるものはなかった。

### 3. 井戸跡



第13図 7号空洞通査

番	色	土種	性	方	堆積物
1	褐色YR5/2	シルト質粘土	少量の鉄物・砂粒・塊状に含む。	上	シルト
2	褐色YR5/2	粘質シルト	塊状・少量の細粒土を含む。	中	2段
3	褐色YR5/2	シルト質粘土	少量の炭化物・土器土を含む。	下	3段
4	褐色YR5/2	粘質シルト	少量の炭化物・塊状の細粒土。	中	4段

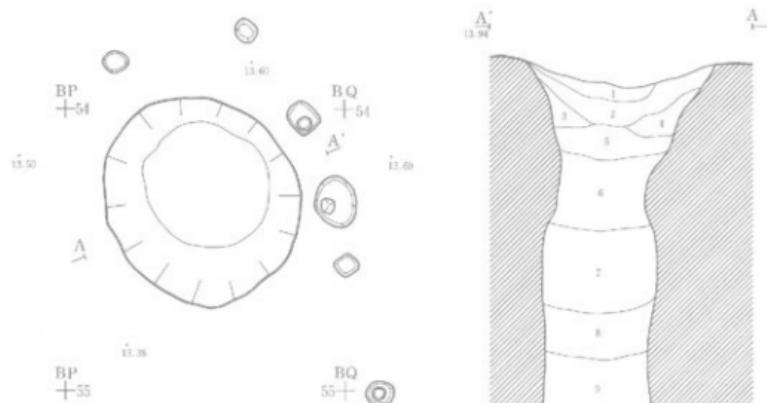
第13表 7号空洞通査土層記録

井戸跡は、基本層序N層から1基検出さ

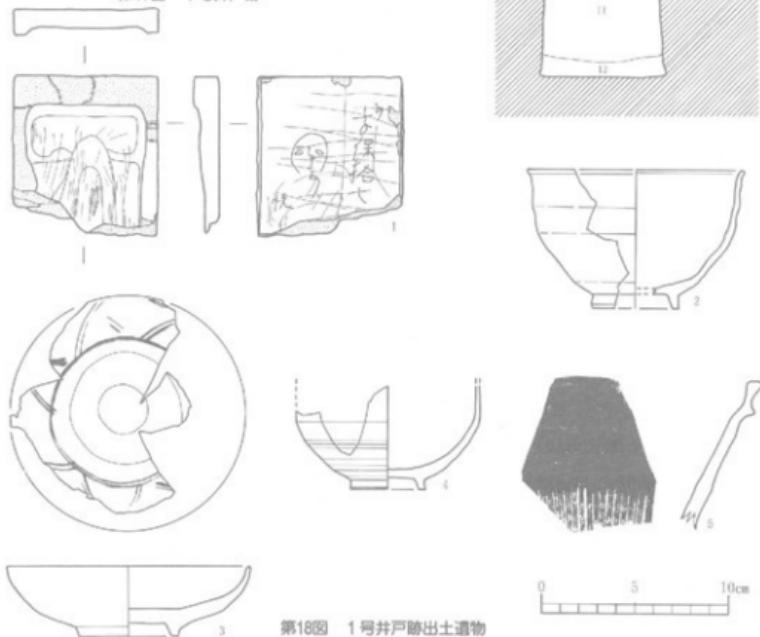
れた。素掘りの井戸で、重複は認められない。井戸跡の位置する調査区南西部の平坦面は、基本層序N層を削平して作られており、そのレベルは、盛土による整地で形成されたII層上面とほぼ同じである。長軸2.27m、短軸2.01m、深さ5.77mの規模で、平面形は上端が橢円形、下端がほぼ円形を呈する。底面はほぼ平坦である。断面形は上部が漏斗状の円筒形で、底面に近くにつれてフ拉斯コ状にやや広がる。壁には本造築を掘り込んだ當時の足場穴と思われるものが、北西側及び南東側から対

番	色	土種	性	考	大	記
1	褐色YR5/2	シルト質粘土	少量の火山灰・砂・塊状に含む。			
2	褐色YR5/2	粘質シルト	塊状・少量の細粒土を含む。			
3	褐色YR5/2	シルト質粘土	少量の塊状YR5/2・粘質シルトを含む。砂粒を含む。			
4	褐色YR5/2	粘質シルト	少量の塊状・細粒土・炭化物を含む。			
5	褐色YR5/2	シルト質粘土	多量の塊状・少量の炭化物を含む。	しまなし		
6	褐色YR5/2	シルト質粘土	多量の砂粒・少量の塊状物を含む。	しまなし		
7	褐色YR5/2	粘質シルト	少量の砂粒・炭化物を含む。	しまなし		自然堆積
8	褐色YR5/2	シルト	少量の砂粒・炭化物を含む。	しまなし		
9	褐色YR5/2	粘質シルト	少量の砂粒・炭化物を含む。	しまなし		
10	褐色YR5/2	シルト	少量の砂粒・炭化物を含む。	しまなし		
11	褐色YR5/2	シルト質粘土	少量の砂粒・炭化物を含む。	しまなし		
12	褐色YR5/2	シルト質粘土	少量の砂粒・炭化物を含む。	しまなし		

第14表 1号井戸跡土層記録



第17図 1号井戸跡



第18図 1号井戸跡出土遺物

をなして検出された。幅15~20cm、奥行き10cm前後の規模で、ほぼ30cm間隔で上下に並ぶ。

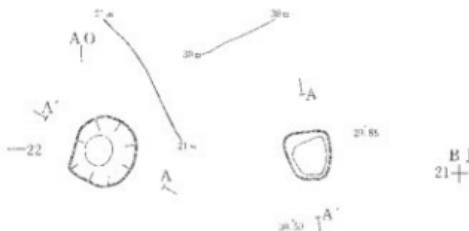
堆積土は、上部が暗褐色から

に近い黄褐色の砂質シルト及びシルト質砂を、下部はグライ化したシルトを主体とする。12層に細分され、いずれも自然堆積層である。

周辺からは6個のピットが検出されたが、本遺構に伴うものとは推定されなかった。

遺物は層No.8から現(雄勝産)、灰陶器(相馬大堀)、層No.11からは灰陶器(相馬大堀)、擂鉢(常滑?、产地不明)、磁器(肥前)、瓦質陶器が出土している(第18図)。現は、長さ4寸5分(約13.9cm)または5寸(約15.4cm)、幅2寸5分(約7.7cm)のもので、漆仕上げされておらず墨痕もなく未製品である。磁石に転用されたものと推定される。現のウラには「享保拾七子」(1732)、「悦?」と人面?の線刻がある。

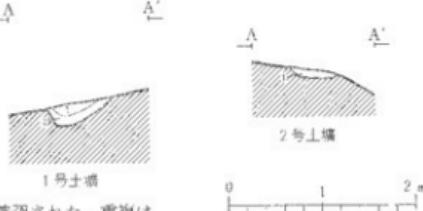
註1. 現については雄勝製生産觀光協同組  
合理事長高橋寅一氏より、陶器器類の  
产地・年代等については仙台市教育委  
員会佐藤洋氏より御教示を得た。



#### 4. 土 壤

土壤は調査区北側の頂部平坦面及び南斜面、西斜面、調査区南西部の平坦面から9基検出された。この中で、3号・5号土壠は基壠である。

##### (1) 1号土壠



第19図 1号土壠・2号土壠

調査区北側西斜面の基本層序Ⅱ層から確認された。重複は認められない。長軸0.74m、短軸0.65m、深さ0.30mの規模で、平面形は不規則形を呈する。床面は丸底で、壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は2層に細分される。いずれも自然堆積層である。

##### (2) 2号土壠

調査区北側頂部平坦面の基本層序Ⅱ層から確認された。重 第16表 1号土壠・2号土壠記録表

1号土壠				
No.	色	性	質	大
1	赤茶	粘	少部分の砂化含、地 下1.5mを除く。	自然堆積層
2	赤茶	粘	少部分の砂化含、地 下1.5mを除く。	自然堆積層

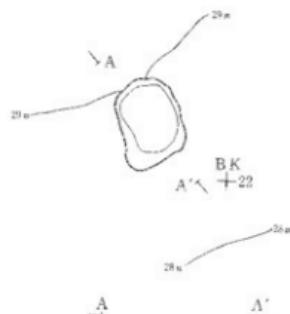
2号土壠				
No.	土	色	性	大
1	赤	茶	少部分の砂化含、地 下1.5mを除く。	自然堆積層

複は認められない。長軸0.51m、短軸0.48m、深さ0.15mの規模で、平面形は不整方形を呈する。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は単層で、自然堆積層である。

#### (3) 3号土壤

調査区北側南斜面の基本層序Ⅳ層から確認された。基盤である。重複は認められない。長軸0.92m、短軸0.67m、深さ0.25mの規模で、平面形は不整方形を呈する。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は4層に細分され、自然堆積土(層No.1、2)と人為的埋土(層No.3、4)からなる。

遺物は、須恵器甕が立位で出土した(第21図)。甕内部からは多量の骨片が出土した。人骨と推定される。甕の底模から、これらの骨片は火葬または再葬されたものと推定される。



A A'



第20表 3号土壤調査記録

第17表 3号土壤出土遺物

地 理 的 的 性 質	外 形	内 部	底 部	口径 × 高 度 (cm)	深 度
自然地盤 2層 口縁・底上部: ローリング、底下部: ラメナリズム	口縁一様上部: ローリング、底下部: ラメナリズム	ローリング	ローリング	17.4 × 1.0 × 23.9	14DN 5-2

第21図 3号土壤出土遺物

#### (4) 4号土壤

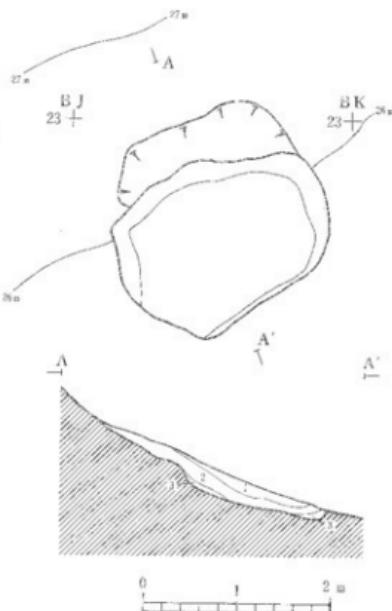
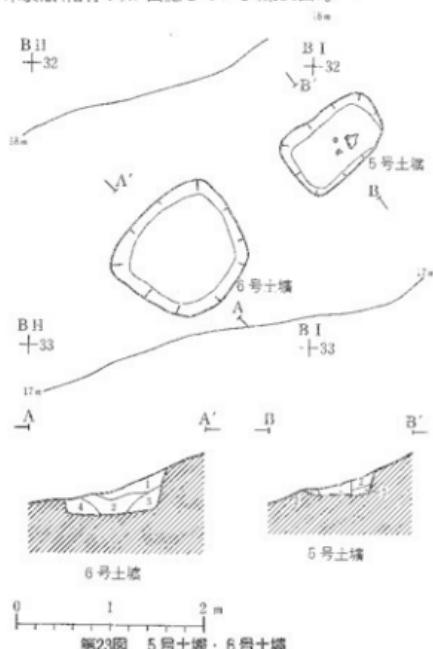
調査区北側南斜面の基本層序Ⅳ層から確認された。重複は認められない。長軸2.36m、短軸

1.66m、深さ0.62mの規模で、平面形は隅丸長方形を呈する。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。また、北壁の一部が崩落している。堆積土は3層に細分され、いづれも自然堆積層である。

### (5) 5号土壤

調査区北側南斜面の基本層序Ⅲ層から確認された。基壇である。重複は認められない。長軸1.12m、短軸0.75m、深さ0.34mの規模で、平面形は隅丸長方形を呈する。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は3層に細分され、人為的埋土(層Na2、3)と自然堆積土(層Na1)からなる。

遺物は、金属製品(錫、煙管)、古銭(寛永通寶)、木製品(棺材?)が出土している(第24図)。



第22図 4号土壤

### 4号土壤

No.	色	性	名	考	大
1	褐色	砂質	少量の粘土を含む砂質土。	砂質の火山灰。	良
2	褐色-黄褐色	砂 質	少量の漂白物を鉱物に含む。	良	基 础 盆
3	褐色	砂 質	少量の漂白物を鉱物に含む。	少量の漂白物を鉱物に含む。	良

### 5号土壤

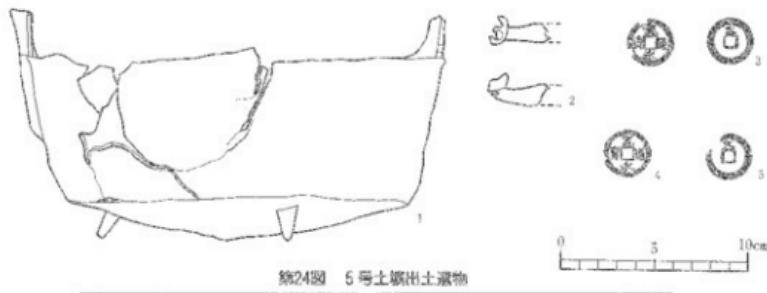
No.	色	性	名	考	大
1	褐色	砂質	少量の漂白物を鉱物に含む。	少量の漂白物を鉱物に含む。	良
2	褐色	砂質	少量の漂白物を鉱物に含む。	少量の漂白物を鉱物に含む。	人 为 的
3	褐色	砂 質	少量の漂白物を鉱物に含む。	少量の漂白物を鉱物に含む。	良

### 6号土壤

No.	色	性	名	考	大
1	褐色	砂質	少量の漂白物を鉱物に含む。	少量の漂白物を鉱物に含む。	良
2	褐色	砂質	少量の漂白物を鉱物に含む。	少量の漂白物を鉱物に含む。	良
3	褐色	砂質	少量の漂白物を鉱物に含む。	少量の漂白物を鉱物に含む。	良
4	褐色	砂質	少量の漂白物を鉱物に含む。	少量の漂白物を鉱物に含む。	良

第18表 4号土壤・5号土壤・6号土壤  
土壤記述表

第24図



第24図 5号土壤出土遺物

No.	地名	基部	頂部	高さ	基部	年	代	方	年	代
1	金剛御前	標	21.6 - 18.5 - 9.8	不	8. 平	8	昌	昌	14	元
2	金剛御前	標	2.3cm	標裏	1.8cm	不	不	昌	9-2	2
3	3. 西	塗朱磁質	φ17 - 2.5cm	不	17C. 保平	新定元、下平、昌	文、正	昌	9-2	3
4	4. 西	塗朱磁質	直径 2.4cm	不	17C. 保平	新定元、下平、昌	文、正	昌	9-2	1
5	5. 西	塗朱磁質	直径 2.4cm	不	17C. 保平	新定元、下平、昌	文、正	昌	9-2	2

第19表 5号土壤出土遺物

なお、本造構上に存在したと推定される墓碑には、「天明四年七月十二日清林道光善男」と記されている。

#### (6) 6号土壤

調査区北側南斜面の基本層序Ⅳ層から確認された。重複は認められない。長軸1.40m、短軸1.25m、深さ0.65mの規模で、平面形は逆台形を呈する。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は4層に細分され、いずれも自然堆積層である。

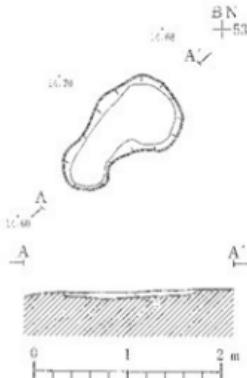
#### (7) 7号土壤

調査区南西部平坦面の基本層序Ⅳ層から確認された。重複は認められない。長軸1.46m、短軸0.85m、深さ0.11mの規模で、平面形は足形を呈する。底面はほぼ平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は単層で、自然堆積層である。

遺物は、瀬戸美濃？の灰釉皿の破片が1点出土している。

#### (8) 8号土壤

調査区南西部平坦面の基本層序Ⅳ層から確認された。重複は認められない。長軸0.70m、短軸0.59m、深さ



第25図 7号土壤

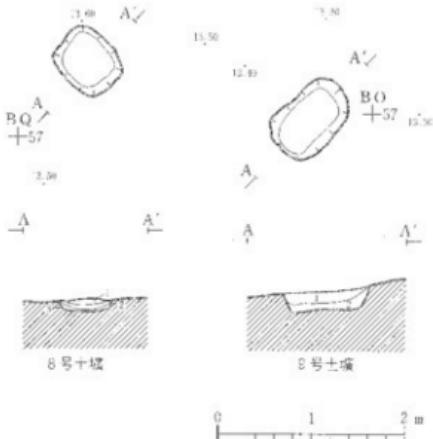
No.	土	色	上	底	方	年	大	的
1	R10YR10Z	シロ	シロ	シロ	シロ	14	元	昌

第20表 7号土壤土層註記表

0.19mの規模で、平面形は隅丸長方形を呈する。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は3層に細分され、いずれも自然堆積層である。

## (9) 9号土壙

調査区南西部平坦面の基本層序Ⅱ層から確認された。重複は認められない。長軸0.88m、短軸0.57m、深さ0.30mの規模で、平面形は隅丸長方形を呈する。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は2層に細分され、いずれも自然堆積層である。



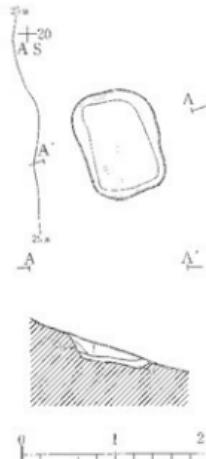
第26図 8号土壙・9号土壙

## 5. 焼土遺構

焼土遺構は、調査区北側の頂部平坦面及び南斜面、

西斜面、調査区南側の西斜面から7基検出された。

## (1) 1号焼土遺構



第27図 1号焼土遺構

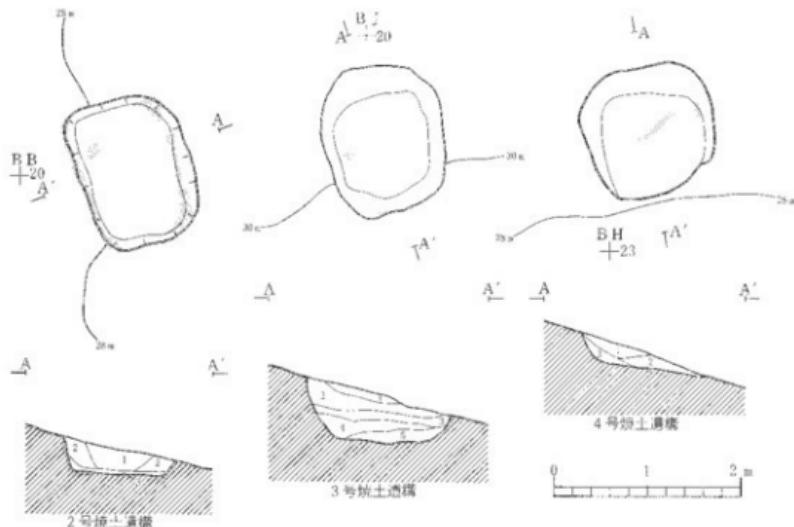
調査区北側西斜面の基本層序Ⅳ層から確認された。重複は認められない。長軸1.14m、短軸0.80m、深さ0.41mの規模で、平面形は隅丸長方形を呈する。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。底面及び側壁の一部が赤褐色に火熱を受けている。堆積土は3層に細分され、自然堆積層(層No.1、2)、炭化物層(層No.3)からなる。

地 上 色	性 質	層 号	大 別
1 赤 褐色	砂 質 シルト	1 10YR 4/3	無 機 物 質 層
2 黄 褐色	砂 質 シルト	2 10YR 4/4	有 機 物 質 層
3 黑 褐色	泥 質 シルト	3 10YR 1/2	炭 化 物 層

第22表 1号焼土遺構土層記載

## (2) 2号焼土遺構

調査区北側西斜面の基本層序Ⅳ層から確認された。重複は認められない。



第28図 2号焼土遺構・3号焼土遺構・4号焼土遺構

長軸1.58m、短軸1.16m、深さ0.46mの規模で、平面形は隅丸長方形を呈する。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。底面及び側壁の一部が赤褐色に火熱を受けている。堆積土は3層に細分され、いずれも自然堆積層である。このうち、層No.1には灰白色火山灰が混入している。

### (3) 3号焼土遺構

調査区北側頂部平垣面の基本層序が層から確認された。重複は認められない。長軸1.57m、短軸1.30m、深さ0.72mの規模で、平面形は隅丸長方形を呈する。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。底面及び側壁の一部がにぶい赤褐色に火熱を受けている。堆積土は5層に細分され、いずれも自然堆積層である。

### (4) 4号焼土遺構

調査区北側南斜面の基本層序が層から確認された。重複は認められない。長軸1.40m、短軸

#### 2号焼土遺構

No.	1. 壁	2. 土	3. 砂	4. 大
1	黒 10YR 4/2	砂 シート	少量の灰白色土と焼成物、粘土を含む。	
2	白 7.5YR 4/2	砂 シート	少量の灰白色土と焼成物、粘土を含む。	白
3	白 5YR 4/2	シート	シートの堆積土へ接続する。	堆積層

#### 3号焼土遺構

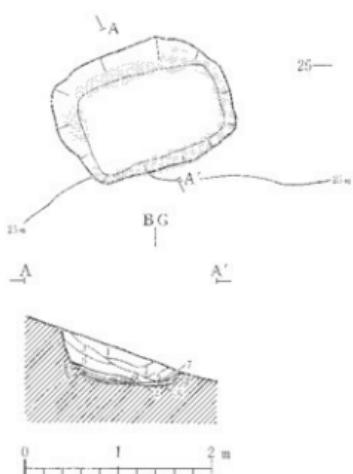
No.	1. 壁	2. 土	3. 砂	4. 大
1	黒 10YR 4/2	シート	シートの間に砂を挟む。	
2	白 10YR 4/2	砂 シート	少量の灰白色土、焼成土を含む。	白
3	白 10YR 4/2	砂 シート	少量の灰白色土を含む。	白
4	白 10YR 4/2	砂 シート	少量の灰白色土、焼成土を含む。	白
5	白 10YR 4/2	シート	少量の灰白色土を含む。	堆積層

#### 4号焼土遺構

No.	1. 壁	2. 土	3. 砂	4. 大
1	黒 10YR 4/2	シート	少量の灰白色土を含む。	白
2	白 10YR 4/2	シート	少量の灰白色土を含む。	白
3	白 10YR 4/2	シート	少量の灰白色土を含む。	白

第23表 2号焼土遺構・3号焼土遺構

4号焼土遺構土層記述

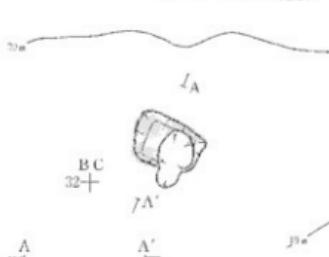


第29図 5号焼土遺構

1.35m、深さ0.52mの規模で、平面形は隅丸長方形を呈する。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。底面及び側壁の一部が赤褐色に火熱を受けている。堆積土は3層に細分され、いずれも自然堆積層である。

## (5) 5号焼土遺構

調査区北側南斜面の基本層序Ⅱ層から確認された。重複は認められない。長軸1.85m、短軸1.33m、深さ0.68mの規模で、平面形は隅丸長方形を呈する。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。底面及び側壁の一部が赤褐色に火熱を受けている。堆積土は10層に細分され、自然堆積層(層No.1~7)、壁崩落層(層No.8、9)、炭化物層(層No.10)からなる。



第30図 6号焼土遺構

## (6) 5号焼土遺構

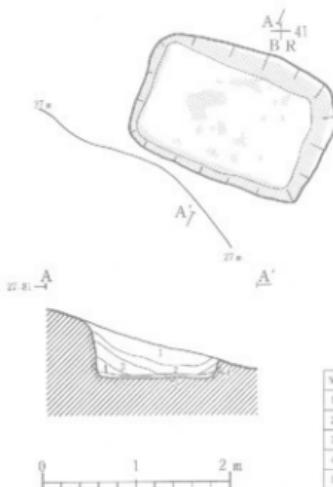
調査区北側南斜面の基本層序Ⅱ層から確認された。搅乱により、一部削平を受けている。長軸0.73m、短軸0.52m、深さ0.24mの規模で、平面形は隅丸長方形を呈する。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。底面及び側壁の大部分が赤褐色に火熱を受けている。側壁からは、本遺構を掘り込んだ当時のものと推定される工具痕が検出された。堆積土は2層に細分され、いずれも自然堆積層である。

層	性質	層厚	特徴
1 焼土層 JYR <sub>2</sub>	シート	少量の灰化物を含む塊状、塊内を粘土化した。	
2 炭化物層 SYR <sub>1</sub>	シート	少量の灰化物を含む塊状。	

第25表 6号焼土遺構層記表

層	性質	層厚	特徴
1 焼土層 JYR <sub>2</sub>	シート	少量の灰化物を含む塊状、塊内を粘土化した。	
2 炭化物層 SYR <sub>1</sub>	シート	少量の灰化物を含む塊状。	
3 焼土層 JYR <sub>2</sub>	シート	少量の灰化物を含む塊状。	自然層
4 炭化物層 SYR <sub>1</sub>	シート	少量の灰化物を含む塊状。	自然層
5 焼土層 JYR <sub>2</sub>	シート	少量の灰化物を含む塊状。	自然層
6 炭化物層 SYR <sub>1</sub>	シート	少量の灰化物を含む塊状。	自然層
7 焼土層 JYR <sub>2</sub>	シート	少量の灰化物を含む塊状。	自然層
8 壁崩落層 SYR <sub>2</sub>	シート	少量の灰化物を含む塊状。	自然層
9 炭化物層 SYR <sub>1</sub>	シート	少量の灰化物を含む塊状。	自然層
10 焼土層 JYR <sub>2</sub>	シート	少量の灰化物を含む塊状。	自然層

第24表 5号焼土遺構層記表



第31図 7号焼土遺構

## (7) 7号焼土遺構

調査区南側西斜面の基本層序IV層から確認された。重複は認められない。長軸2.08m、短軸1.43m、深さ0.61mの規模で、平面形は隅丸長方形を呈する。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。底面及び側壁の一部が赤褐色に火熱を受けている。側壁からは本遺構を掘り込んだ当時のものと推定される工具痕が検出された。堆積土は5層に細分され、自然堆積層(層No.1～4)、炭化物層(層No.5)からなる。

No.	土色	土性	層	考	大別
1	褐鐵土YR3/2	砂質シルト	少量の炭化物、地山土を粒状に含む。		
2	褐土YR4/2	砂質シルト	少量の褐鐵土YR3/2砂質シルト、炭化物、地山土を粒状に含む。	自然	
3	黄褐色YR5/2	シルト質砂	少量の炭化物を粒状に含む。	堆積層	
4	黃褐色YR5/2	シルト質砂	少量の黒鉄物を含む。地山土を粒状に含む。		
5	黑褐色5/2	シルト	少量の褐鐵土YR3/2砂質シルトを粒状に含む。	堆積層	

第26表 7号焼土遺構土層記表

## 6. 溝跡

溝跡は、調査区南西部平坦面及び緩斜面から4条検出された。この中で、3号・4号溝跡は江戸期のものと推定される。

## (1) 1号溝跡

調査区南西部緩斜面の基本層序IV層から確認された。2号住居跡の北西壁の一部を切っている。幅60～120cm、深さ10～40cmの規模で、断面形は舟底形を呈する。底面レベルは2号住居跡の南東隅に接した部分が最も高く、北西隅に向かうにつれてレベルを減じる。堆積土は5層に細分され、いずれも自然堆積層である。

## (2) 2号溝跡

調査区南西部緩斜面の基本層序IV層から確認された。3個のビット及び搅乱穴に切られている。幅30～80cm、深さ10～50cmの規模で、断面形は舟底形を呈する。底面レベルは北西隅が最も高く、南東隅に向かうにつれ

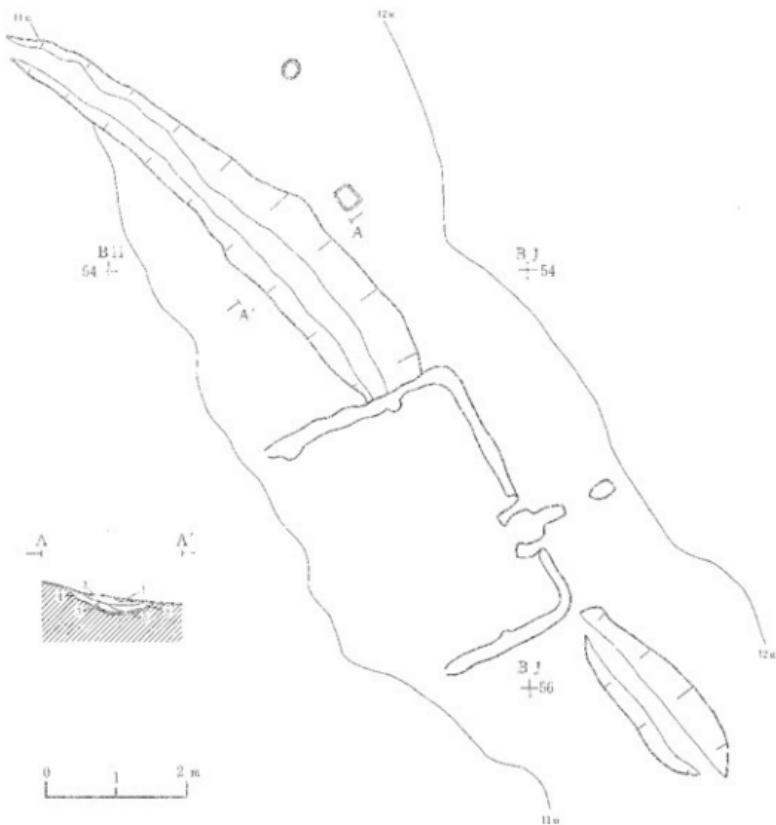
## 1号溝跡

No.	土色	土性	層	考	大別
1	黒褐色YR1/2	シルト	多量の褐鐵土YR3/2砂質シルトを粒状に含む。		
2	こげた黒褐色10YR4/2	シルト	少量の炭化物、地山土を粒状に含む。		
3	灰褐色YR2/2	粘土質シルト	少量の地山土を粒状に含む。	自然	
4	こげた黒褐色10YR4/2	シルト	少量の地山土を粒状に含む。		
5	黒褐色YR1/2	シルト	少量の地山土を粒状に含む。	堆積層	
6	こげた黒褐色10YR4/2	シルト	少量の地山土を粒状に含む。		

## 2号溝跡

No.	土色	土性	層	考	大別
1	褐褐色YR3/2	シルト	少量の炭化物、地山土を粒状に含む。	自然	
2	灰褐色YR2/2	シルト	少量の地山土を粒状に含む。	堆積層	

第27表 1号溝跡・2号溝跡土層記表



第32図 1号溝跡

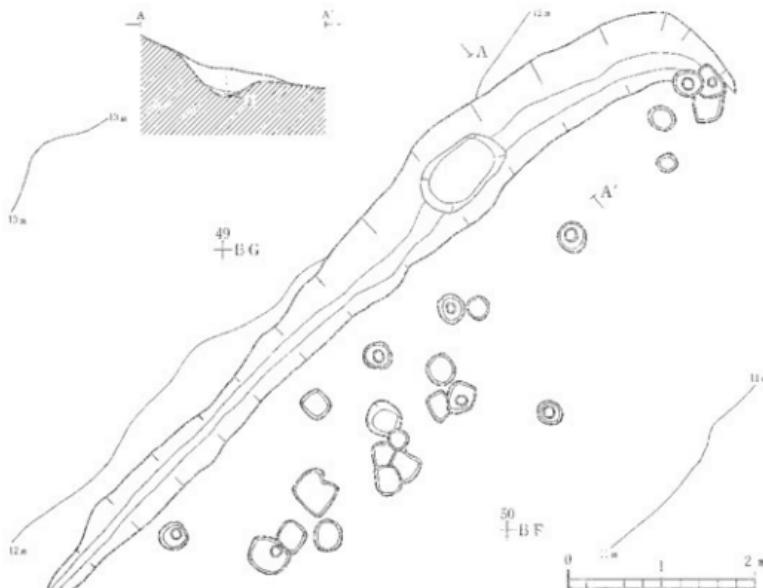
てレベルを減じる。堆積上は2層に細分され、いずれも自然堆積層である。

遺物は、層No.1より土師器片が出土している。

なお、本遺構の南西側にはピット群が検出されているが、ピット群との同時性は確認されなかった。

### (3) 3号溝跡

調査区南西部平坦面の北東端の全部及び南東端、北西端の一部を区画する溝で、基本層序Ⅱ層及びⅣ層から確認された。南東隅に近い一部が擾乱穴に切られている。幅60~130cm、深さ10



第33図 2号溝跡・ピット群

~25cmの規模で、断面形は基本的に舟底形を呈する。底面レベルは1号溝跡と接する部分のやや南東側が最も高く、両端に向かうにつれてレベルを減じる。堆積上は2層に細分され、いずれも自然堆積層である。

遺物は、層No.1及び層No.2より施釉陶器(粗馬大堀・唐冲ほか)、擂鉢(鉄軸・無軸)、磁器(肥前)、上師質陶器が出土している。

地	色	土性	特徴	大
1	赤褐色	砂質	粗馬・唐冲の焼物を最高、切口を除く塊状。	自然
2	褐色	粘質	粗馬の焼物を初段に。	地質

第33表 3号溝跡土層性記載

#### (4) 4号溝跡

調査区南西部平坦面のはば中央を南北に二分する溝で、基本層序Ⅱ層及びⅣ層から確認された。重複はない。幅40~60cm、深さ10~15cmの規模で、断面形は基本的に舟底形を呈する。底面レベルは3号溝跡に接する部分が最も高く、南西隅に向かうにつれてレベルを減じる。堆積上は2層に細分され、いずれも自然堆積層である。

遺物は、層No.2より擂鉢(鉄軸)が出土している。

國化できるものはなかった。

地	色	土性	特徴	大
1	褐色	シルト	少部分の柱状化と板状、塊状。	自然
2	褐色	シルト	粗粒を含む塊状。	地質

第34表 4号溝跡土層性記載

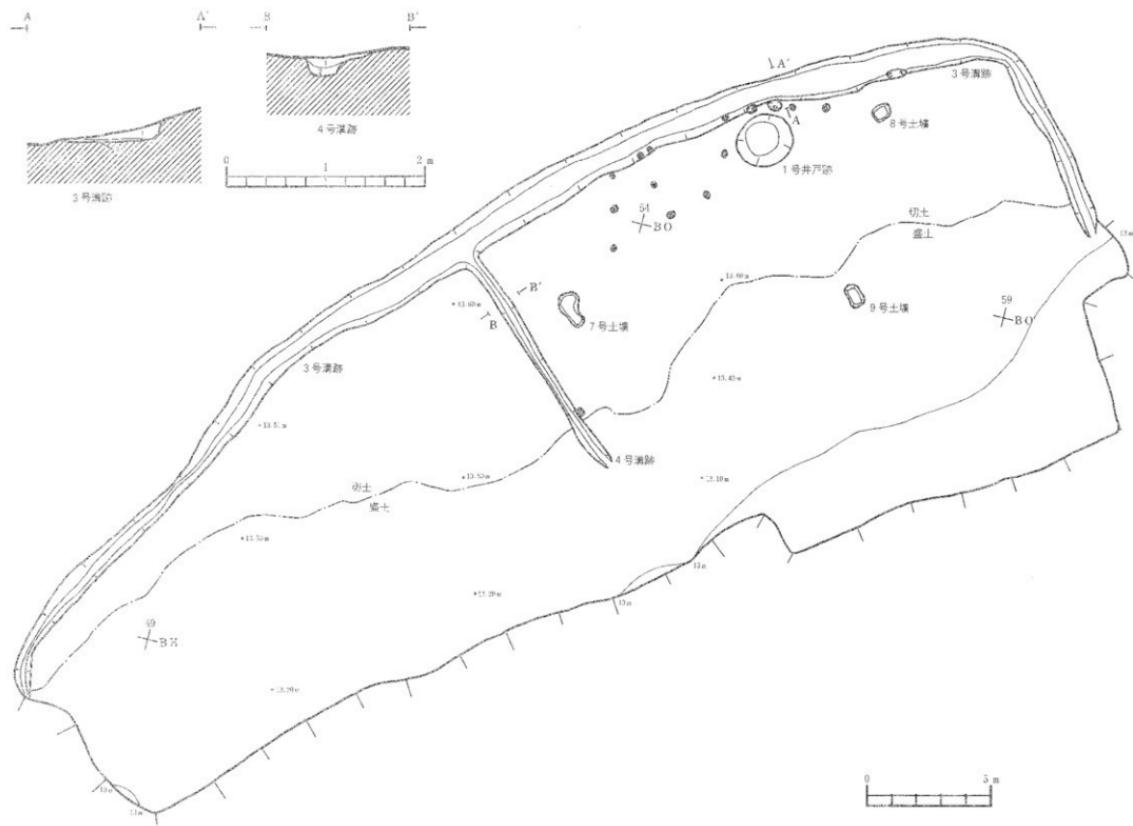
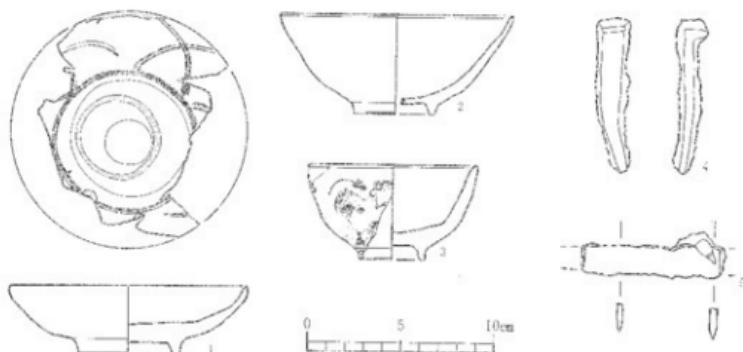


图32 3号沟谷・4号沟谷・地形图



図F-7 3号窯跡出土遺物

No.	施 室	壁 厚	内径	高さ	形	内	外	特	性	固 定
1	鉢	厚	22.2	3.4	1.2	無	無	C.	発竹、泥入丸の付着部	13-1
2	鉢	薄	22.2	4.9	1.3	無	無	C.	発竹、灰灰	
3	器	薄	6.1	2.5	2.1	無	無	C.	発竹、赤褐色・くろいんかみ	13-2
4	小鏡	薄	無	7.8cm	薄	1.1cm	厚	無	-	15-4
5	金屬製品	薄	2.7cm	1.7cm	1.7cm	厚	2.4cm	不	-	15-3

表F-7 3号窯跡出土遺物

## 7. その他の遺構と出土遺物

以上の遺構のほかに、調査区南西部平坦面及び緩斜面よりピット群、轟地面が検出された。

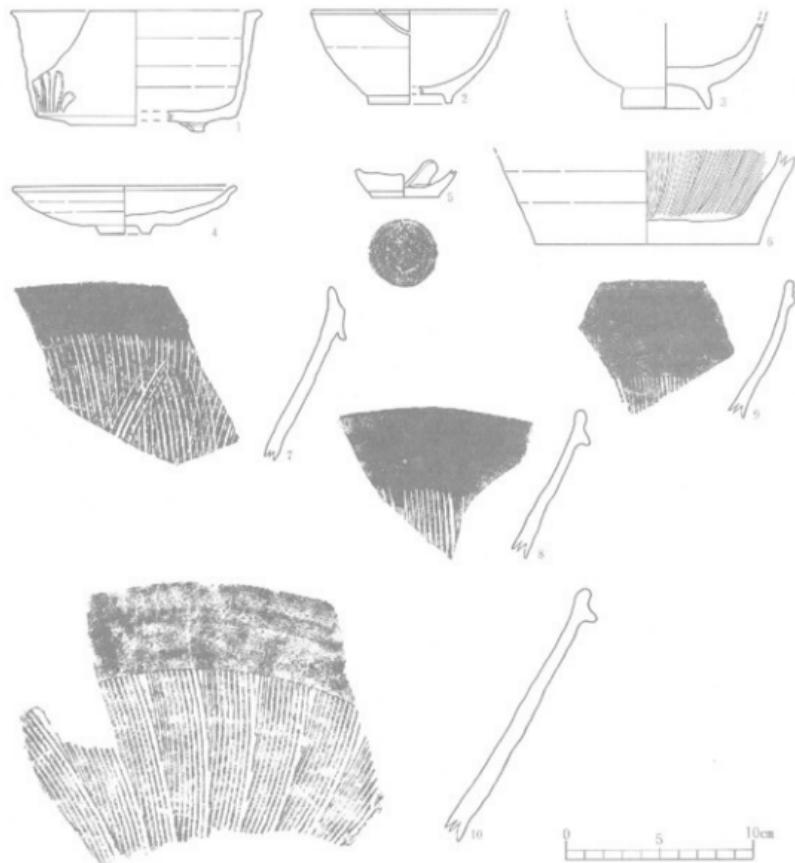
### (1)ピット群

調査区南西部平坦面及び緩斜面の基本層序Ⅱ層から約19個のピットが検出された。深20~50cmと大小さまざままで、平面形や深さも一定しない。堆積土も多様である。柱根跡の確認されたものも19個あるが、いずれも周囲のピットとの対応関係は認められなかった。

### (2)轟地面

調査区南西部平坦面を形成する基本層序Ⅱ層及びⅢ層からなる。基本層序Ⅲ層の一部を切土し、基本層序Ⅱ層上に盛土して轟地面が形成されている。平面レベルはⅠ号溝跡のやや北側が最も高く、北端、南端に向かうにつれてレベルを減じる。最高所と最低所のレベル差は、128cmである。

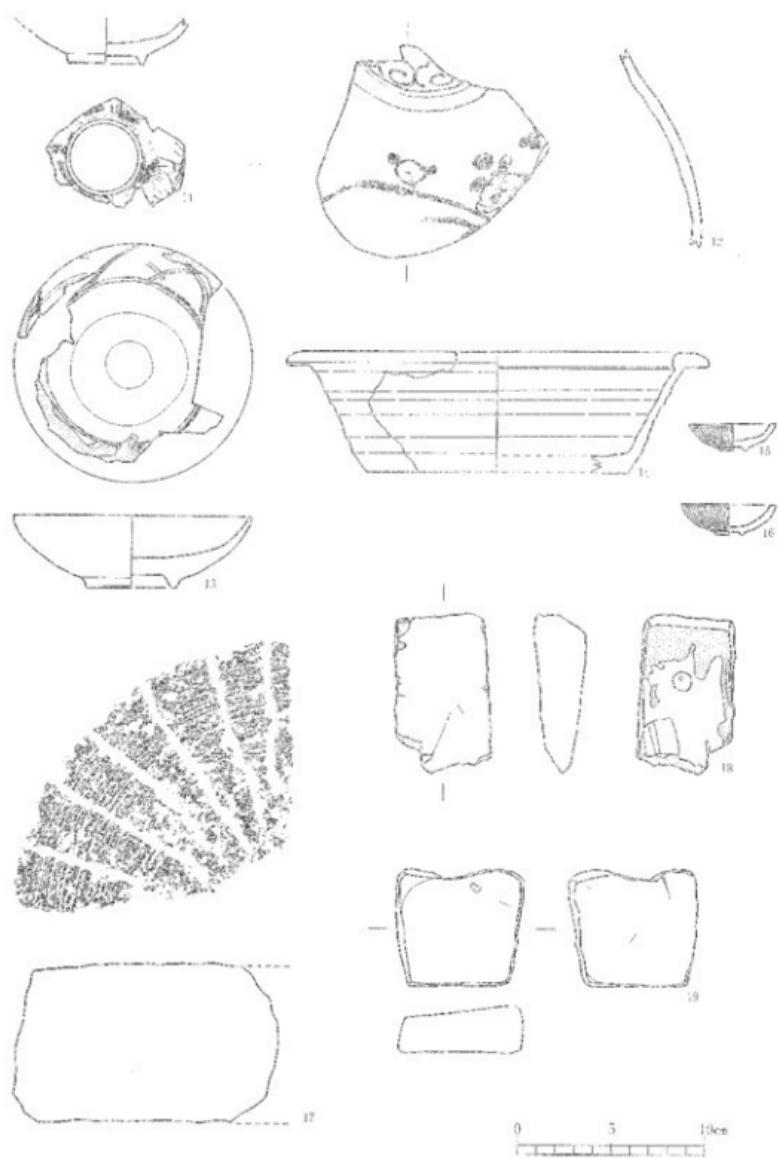
遺物は、施釉陶器(柏馬大堀・唐津・瀬戸美濃ほか)、擂鉢(鉄軸・鉄化粧)、磁器(配前ほか)、瓦質陶器、土質品、石製品、金属製品、古錢が出土している(第36~第38図)。



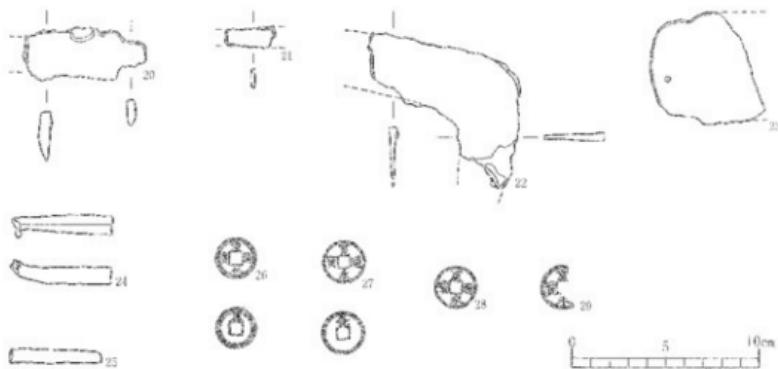
第36図 整地面出土遺物(陶器)(1)

番号	種類・形	口径・底径・髙さ(cm)	地	年代	性	回数
1	鉢 直 瓶	13.4・10.7・5.4	粗目 塗	18 C	云部印施、茎丸文、鼓形・丸ノミ形	15-16
2	鉢 瓶	10.6・4.5・5.0	粗目 不規	19	C、云部・土風模様・脚付	13-11
3	陶 瓶	—	粗	18 C	茎	15-8
4	陶 瓶	12.0・2.8・2.5	粗	17 C-18 C	茎	15-9
5	陶 瓶	3.6	粗地 不規	18 C	不規	15-12
6	陶 瓶	12.0	粗地 不規	江戸	口	16-5
7	陶 瓶	—	粗地 不規	江戸	脚付	16-1
8	陶 瓶	—	粗地 不規	17 C	丸	16-2
9	陶 瓶	—	粗地 不規	18 C	丸	16-3
10	陶 瓶	—	粗地 不規	江戸	半基	16-4

第36表 整地面出土遺物(1)



第37図 駒形山遺跡(鍵形・瓦質土器・石器) (2)



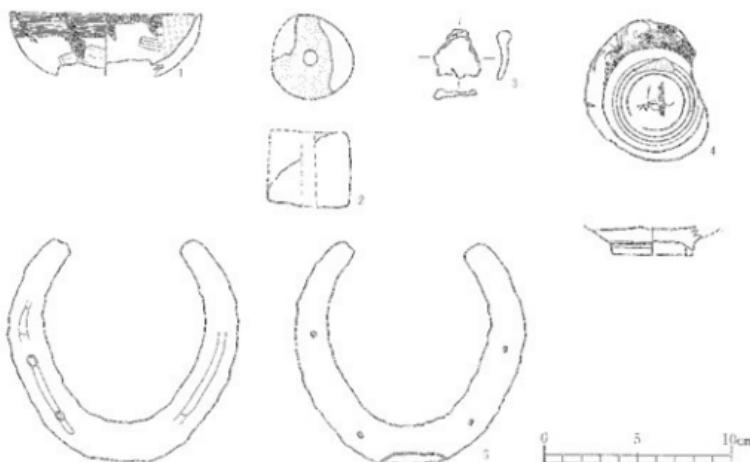
第36図 磐地西面出土遺物(金属製品・古鏡)(3)

名	種類	器形	口径	底厚	高さ(cm)	年	代	性	説	区
11 銀 型	鏡	—	4.1	—	—	—	—	生	鏡身	10-6
12 銀 型	鏡	—	—	—	—	—	—	生	鏡身	15-7
13 銀 型	鏡	12.5	4.9	3.9	—	—	—	生	鏡身、裏いのりの目隠鏡	15-5
14 銀 腹帶	鏡	22.5	6.9	5.5	—	—	—	生	鏡身	16-4
15 銀 型	鏡	4.8	1.3	—	—	—	—	生	鏡身、裏いのり	15-5
16 銀 型	鏡	5.0	1.3	—	—	—	—	生	鏡身、裏いのり	15-4
17 銀 刃基	刀	—	15.2cm	厚：5mm	—	—	—	研磨者	刀身	10-7
18 石 刃基	刀	—	2.4cm	厚：3.2mm	厚：2.7mm	—	—	研磨者	刀身	16-8
19 石 刃基	刀	—	6.2cm	厚：4.5mm	厚：2.6mm	—	—	研磨者	刀身	16-9
20 金屬製品	小刀	—	6.5cm	厚：2.5mm	厚：0.6mm	—	—	研磨者	刀身	16-10
21 金屬製品	不明	—	2.4cm	厚：1.1mm	厚：0.2mm	—	—	研磨者	刀身	16-11
22 金屬製品	鏡	—	8.2cm	厚：2mm	厚：0.2mm	—	—	研磨者	鏡身	16-12
23 金屬製品	鏡	—	6.0cm	厚：2.5mm	厚：0.2mm	—	—	研磨者	鏡身	16-13
24 金屬製品	鏡	—	5.5cm	厚：1.8mm	厚：0.2mm	—	—	研磨者	鏡身	16-14
25 金屬製品	鏡	—	5.5cm	厚：1.8mm	厚：0.2mm	—	—	研磨者	鏡身	16-15
26 小 刃	鐵刀	—	2.3cm	—	—	—	—	研磨者、鍛造者、切削者、質屋元(1741)	刀身	6-17
27 小 刃	鐵刀	—	2.4cm	—	—	—	—	研磨者、鍛造者、切削者、質屋元(1741)	刀身	6-18
28 小 刃	鐵刀	—	2.4cm	—	—	—	—	研磨者、鍛造者、切削者、質屋元(1741)	刀身	6-19
29 小 刃	鐵刀	—	2.5cm	—	—	—	—	研磨者、鍛造者、切削者、質屋元(1741)	刀身	6-20

第32表 磐地西面出土遺物(2)、(3)

## (3) 造構外出土遺物

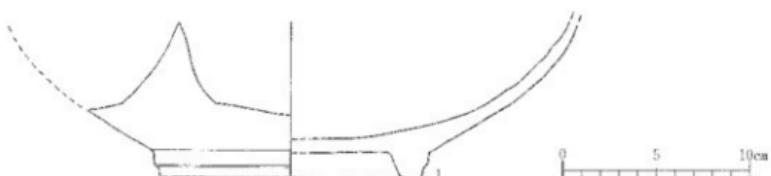
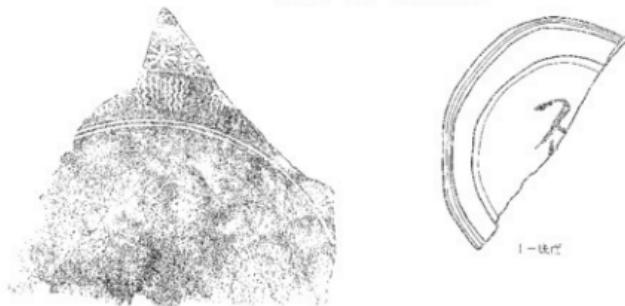
以上の造構に伴って多数の遺物が出土したが、この他に基本層序、表面採取による出土遺物がある。調査区北側斜面の基本層序Ⅰ層からは十師器、須恵器、上縫、調査区南西部緩斜面の基本層序Ⅱ層からは須恵器、金属製品が出土している。調査区南西部平緩面の基本層序Ⅲ層からは磁器(肥前)、金属製品が出土した。また土師器、須恵器、施釉陶器(和馬大綱・唐津・堤ほか)、磁器(肥前ほか)、土製品、石製品、石塔、板磚が調査区内より表面採取された(第39~第41図)。



第39図 Ⅲ層・I層出土遺物

番号	名前	形状	口径・底径・器高cm	材質	時代	出	西	東
1	鉢	縁	φ3.7	土器	ミクアマヤ式	内面・ヘリ	14-2-1	
2	土器	盤	径4.5cm 高さ1.0cm	土器			14-2-2	
3	火鉢鉢	平	径2.6cm 高さ2.3cm 厚さ0.6cm	土器				
4	鉢	縁	φ4.2	土器	15	C		17-1
5	手鏡鉢	縁	φ1.9cm 高さ2.2cm	土器	15	1		17-2

第33図 Ⅲ層・I層出土遺物



第40図 袋探遺物(1)

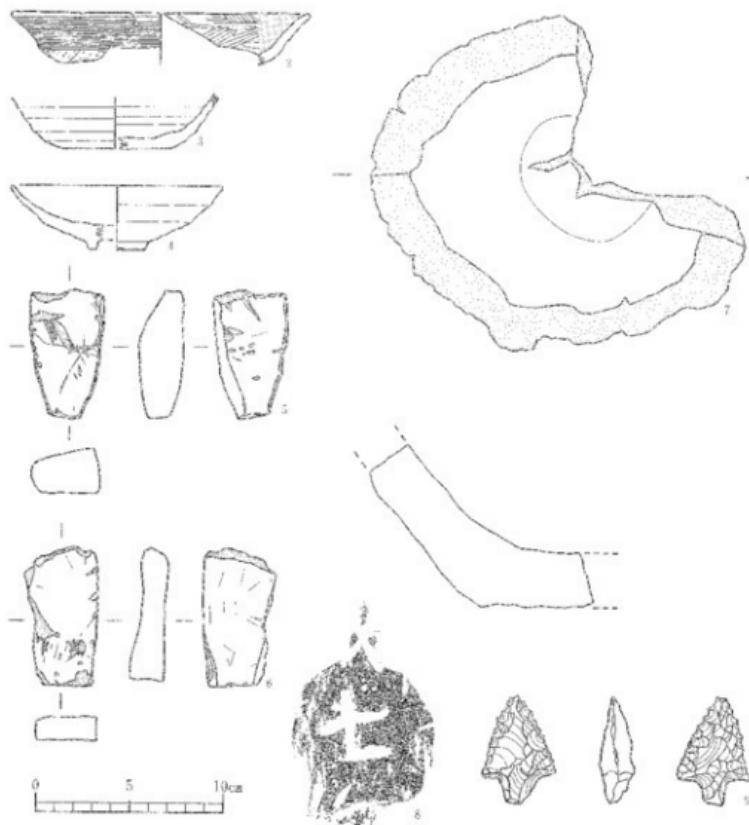


図7 番号(2)

No.	性質・種類	寸法・材質・表面状態(cm)	周 遠	年代	特 訴	西	日 標
1	石器類・人骨	— 12.0 —	無	17C. 前半	三脚刀、神化鉈、有頭石鎚等		17-2
2	土 壁	15.0	内面	ロコブ・テクニク	内面・ベニヒガモ・黑色絞用		
3	瓦 瓦 制 作	— 1.6 —	内面	ロコブ・テクニク	四面・ロコブテクニク		
4	鐵 鋸	11.3 - 20.0 - 2.4	丸	17C. 後半	丸刃		
5	砂岩類 遺 物	長 6.8cm 幅 5.6cm 厚 1.2cm	無	後			17-2
6	石器類	17.0cm	無	新			17-2
7	青銅器 銅 盆	長 17.6cm 幅 13.8cm 厚 1.3cm	無	新	銅器		17-6
8	石器類・石 斧	— — —	丸	新	石斧		17-4
9	石器類・石 斧	長 1.5cm 幅 1.3cm 厚 0.7cm	無	新	石斧		17-7

図7 番号(1), (2)

## V. 考察とまとめ

### 1. 遺物と遺構

今回の調査によって出土した遺物は、大きく古代と近世に分けられる。そこで、古代の遺物を出土した遺構ごとに検討していく。

#### (1)住居跡

1号住居跡の床面及びカマド底面からは土師器杯、須恵器杯が出土している(第5図)。土師器杯は、非クロロ使用のものとクロロ使用のものである。クロロ使用のものは、外側部上半にヨコナデ、体部下半にケズリ、内面上半にリコナデ、下半にヘラミガキ、内面全面に黒色処理、底部にはケズリが施されている。口縁部には沈線を意識したくぼみが見られ、体部下半は内湾している。また、内外面に多量の油塵が付着している。同様の例は、仙台市六反田遺跡(佐藤洋: 1987.3)、多賀城市市川橋遺跡(瀧口卓: 1990.3)等に見られる。外側への付着状況から、燈明眼として用いられたものと推定される。クロロ使用のものは外側ともロクロナデで、底部にはヘラケズリが施されている。口縁部には沈線を意識したくぼみが見られ、体部下半が内湾しながら口縁部に向かって急な角度で立ち上がる。内面には部分的に炭化物が付着している。地域的な特色をもたない、銅碗に近似した器形を呈している。このように銅碗に近似した器形を呈した杯は、古川市宮沢遺跡(斎藤・後藤: 1985.3)、色麻町色麻古墳群上郷109号墳(藤沼・加藤: 1985.3)、仙台市六反田遺跡(佐藤洋: 前掲)、岩手県盛岡市志波坂跡(盛岡市教育委員会: 1980.3)、福島県郡山市広瀬遺跡(高松・柳田ほか: 1985.3)、福島県石川町梅木平遺跡(大河: 福島ほか: 1984.3)、福島県石川町谷地前C遺跡(玉川一郎ほか: 1980.3)、福島県鹿島町真野古墳群小池8号墳(森宮茂: 1964)等から出土している。<sup>註1</sup>また、器形としては、平城宮V(西弘海: 1986.5)に分類されるものに近似している。須恵器杯はクロロ使用のもので、外側ともロクロナデ、底部は回転糸切りが施されている。口縁部がやや強制的に外反し、体部下半がやや丸味を帯びている。薄手で赤変している。出土状況から考え、カマドの支脚として再利用されたものと推定される。

註1. 銅碗に近似した器形の杯については、多賀城跡調査研究所村田亮一氏よりご教示を得た。

2号住居跡のカマド底面からは、赤焼き土器杯が出土している(第7図)。クロロ使用のもので内外面ともロクロナデ、底部は回転糸切りが施されている。体部から口縁部に向かって逆台形状に直線的に立ち上がる。他に、クロロ使用の土器窓の破片が出土している。これらは、

出土状況から考え、カマドの支脚として再利用されたものと推定される。

3号住居跡の床面からは、ロクロ使用の土師器甕の破片が出土している。

また、1号住居跡では堆積土とカマド、3号住居跡では堆積土、周溝、内溝、柱穴に灰白色火山灰を含んでいる。

1号住居跡の土師器甕には、非ロクロ使用とロクロ使用のものが共存している。近年の調査例では、多賀城市川瀬遺跡(石川俊英：1990.3)、同高崎遺跡(石川・相沢ほか：1987.3)で共存が報告されている。高崎遺跡では、おおむね8世紀後半から9世紀初頭の年代が考えられている。1号住居跡では、遺物の特徴を考慮して、おおむね8世紀後半から9世紀前半頃までの年代が考えられる。

2号住居跡、3号住居跡は、資料数が不足しているが、製作にあたってロクロが使用される表衫ノ入窓である。おおむね9世紀代で、1号住居跡に後続する年代が考えられる。

## (2)堅穴遺構

1号堅穴遺構の周溝からは土師器甕、土鍤が出土している(第10図)。土師器甕は、内面がヘラミガキ・黒色処理が施されている。外面は不明だが、体部はおそらくヘラケズリが施されているものと考えられる。

3号堅穴遺構の1層からは土師器甕が出土している(第12図)。外側体部上半にヨコナデ、体部下半にケズリ、内面にヘラミガキ、黒色処理が施されている。体部下半は逆台形状に立ち上がり、中央から上半部にかけてはやや丸味を持ちながら急に立ち上がる。

2号・4号・6号・7号堅穴遺構からも、周溝や貯藏穴状ピットより土師器片が出土しているが、いずれも小片で磨滅が激しく、資料の点数も少なく、有効な資料とは言い難い。

また、3号・7号堅穴遺構と3号住居跡の間にはそれぞれ重複関係がある。その関係は、3号住居跡→3号堅穴遺構→7号堅穴遺構となる。3号住居跡は、おおむね9世紀代で、1号住居跡に後続する年代が考えられるため、3号堅穴遺構、7号堅穴遺構は、それぞれ3号住居跡、3号堅穴遺構に後続する年代が考えられる。1号堅穴遺構は、図示されていない土師器を含めた中で、1号住居跡と同じ時期またはややさかのぼるものと考えられる。2号・4号・5号・6号堅穴遺構については、他の1号・3号・7号堅穴遺構と同様の検出状況にあることから、1号・7号堅穴遺構の年代の中に入ってくるものと考えられる。

## (3)3号土壤

3号土壤は須恵器甕の埋設遺構である(第21図)。須恵器甕は、外面口縁部～体部上半がロクロナデ、体部下半がロクロナゲ、ヘラケズリ、内面口縁部～体部上半がロクロナデ、体部下半

がクロナデ・ナデが施されている。口縁部は外反し、頸部が「く」字状に屈曲、体部上半の高い所に最大径をもつ。窓内部からは、人骨と推定される骨片が検出されている。同様の例として、多賀城市高崎遺跡(石川・相沢ほか:1987.3)、同山上遺跡(石川・相沢:1992.3)、仙台市下ノ内浦遺跡(渡部:1988.3)等が挙げられる。但し、前記のものは、いずれも土師器窓を用いて横位であるが、本遺構では須恵器窓を用いて立位である。<sup>註2</sup> 窓骨器の形態をとるものと推定されるが、蓋に相当する部分については不明である。1号住居跡と同じ、おおむね8世紀末から9世紀前半頃までの年代が考えられる。

註2. 9世紀頃のものとしては、埼玉県宮代(大林)遺跡がある。この点については、多賀城市坪原文化財調査センター石川俊英氏にご教示いただいた。

#### (4) 1号井戸跡

1号井戸跡からは鏡、相馬大堀産の碗、肥前産の染付皿、常滑?窓の捕鉢等が出土している(第18図)。相馬大堀産の碗については、仙台市松木遺跡の初期前半(工藤・佐藤ほか:1986.12)、仙台城三ノ丸跡のⅡ期(鮎城・佐藤ほか:1985.3)に相当する。また、肥前産の染付皿は見込み蛇の目釉刷ぎで、高台から体部下半は浅い角度で、体部上半は急な角度で立ち上がる。仙台市松木遺跡のⅡ期前半に相当する。鏡は雄勝産で、クリ彫によるものである。石材である玄昌石の剥離し易い性質を防ぐために、鏡は漆仕上げされる。しかし、この鏡は漆仕上げされておらず墨痕も確認されなかったことから、鏡としては未製品であると考えられる。磨滅の状況から、砥石に転用されたものと推定される。ウサには「宇保鑄七子」(1732)とあり、前記の出土遺物と併せて、これらは18世紀代のものと推定される。これらの状況により、1号井戸跡は、おおむね18世紀から19世紀前半にかけての年代が考えられる。

#### (5) 5号土壙

5号土壙からは寛永通寶、鐵鍋、煙管等が出土している(第22図)。寛永通寶は新寛永で、寛文8年(1668)以降に鋳造されたものである。鐵鍋を作り無垢の例としては、大和町日光山遺跡(藤沼・白鳥ほか:1981.6)が挙げられる。上部に存在したと推定される墓碑には天明4年(1784)の紀年銘がある。

#### (6) 3号・4号溝跡

3号溝跡からは肥前産の碗・皿、金属製品が出土している(第35図)。他に相馬大堀産の碗、唐津産の皿等の破片が出土している。肥前産の碗は、くらわんか手と呼ばれるもので、外面に梅樹文がある。同様のものは、仙台城三ノ丸跡、松山町上野船跡(手塚・佐久間:1992.3)等に

地 點	種 別	遺 物										遺 跡
		火 器 類	刀 劍 類	鉢 類	瓶 類	甌 類	壺 類	盒 類	筒 類	器 皿	其 他	
17C. ~ 18C. 18C. 極早 18C. 極晩 19C. 年代不明	火器類	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	遺跡不明・焼却面
17C. 後半 18C. 極早 18C. 極晩 19C. 年代不明	刀劍類	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	遺跡不明・焼却面
17C. 後半 18C. 極早 18C. 極晩 19C. 年代不明	甌類	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	遺跡不明・焼却面
17C. 後半 18C. 極早 18C. 極晩 19C. 年代不明	壺類	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	遺跡不明・焼却面
17C. 後半 18C. 極早 18C. 極晩 19C. 年代不明	盒類	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	遺跡不明・焼却面
17C. 後半 18C. 極早 18C. 極晩 19C. 年代不明	筒類	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	遺跡不明・焼却面
17C. 後半 18C. 極早 18C. 極晩 19C. 年代不明	器皿類	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	遺跡不明・焼却面
17C. 後半 18C. 極早 18C. 極晩 19C. 年代不明	其他類	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	遺跡不明・焼却面
17C. 後半 18C. 極早 18C. 極晩 19C. 年代不明	其 他	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	遺跡不明・焼却面
17C. 後半 18C. 極早 18C. 極晩 19C. 年代不明	總計	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

第35表 群田遺跡出土陶器器年代・產地・器種別統計表(1)

地 點	種 別	遺 物										土壤質地等六 等
		火 器 類	刀 劍 類	鉢 類	瓶 類	甌 類	壺 類	盒 類	筒 類	器 皿	其 他	
18C.	火器類	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3
18C.	刀劍類	3	1	2	6	-	-	-	-	-	-	5
18C.	甌類	4	2	1	3	-	-	-	-	-	-	3
18C. 極早 18C. 極晩 19C. 年代不明	壺類	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
18C.	盒類	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
17C. 後半 18C. 極早 18C. 極晩 19C. 年代不明	筒類	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
18C.	器皿類	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
17C. 後半 18C. 極早 18C. 極晩 19C. 年代不明	其他類	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
18C.	總計	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

第36表  
群田遺跡出土陶器器年代・  
產地・器種別統計表(2)

出土例が見られる。肥前産の染付皿は、1号井戸跡と同様のものである。他に肥前産の丸紋碗、網目碗の破片が出土しているが、これらは18世紀代のものと考えられる。また、前記の皿については、1号井戸跡出土の成片と接合関係にある。これらの状況より、3号溝跡は、おおむね18世紀から19世紀前半にかけての年代が考えられる。また、3号溝跡と同様に敷地面を区画する性格を有する4号溝跡は、3号溝跡と重複する部分において新旧関係が見られないこと、底面付近で出土した埴輪が18世紀代のものであることから、3号溝跡と同様の年代が考えられる。

#### (7) 敷地面

##### ①出土遺物

敷地面からは柏馬大堀產の碗、柏津產の碗・皿、瀬戸美濃產の香爐、肥前產の碗・皿・壺、產地不明の陶器、磁器、寛永通寶が出土している(第36・37・38図)。唐津產の碗については、仙台城三ノ丸跡のⅢ期に相当する。<sup>註3</sup>同じく皿は見込蛇の目釉剥ぎで、内面青緑釉である。肥前陶器のⅣ期、仙台城三ノ丸跡のⅡ期終末からⅢ期にかけての時期に相当する。瀬戸美濃產の香爐は、外面及び内面に縞模様が黄瀬戸釉で、筒形を基する。口部はやや外面に張り出し、外面部下半に菊花文(陰刻・丸のみ影)、底部は3足付である。『尾張陶磁』(井上喜久男: 1992.5)<sup>註4</sup>の登場Ⅲ期時期以降、おおむね18世紀代のものと考えられる。壺は鉄釉または鉄化粧で、おろし目の間隔が開くものと閉じるものがある。產地は特定できないが、17世紀代と18世紀代のものと考えられる。肥前產の染付碗は体部に草花文を有し、仙台城三ノ丸城Ⅲ期に相当する。染付皿は見込蛇の目釉剥ぎで、高台から体盤下部は浅い角度で、体部上半は急な角度で立ち上がる。<sup>註5</sup>肥前磁器(大橋龍二: 1989.10)のⅣ期、仙台山松木遺跡Ⅳ期前半に相当する。染付壺(あるいは瓶)は、外面彫部に唐草文、体部上半に三重の圓線、体部には梅樹あるいは草花を意図した文様がある。同様の出土例は、松山町上野越跡に見られる。肥前磁器のⅣ期に分類される特徴を有し、おおむね18世紀代のものと考えられる。寛永通寶は4点出土している。2点は古寛永(芝銭・坂本銭)で、ともに寛永13年(1636)以降に鋳造されたものである。他の2点は新寛永である。大阪で鋳造された細字背元は寛保元年(1741)以降、長崎で鋳造された背長は明和4年(1767)以降鋳造されたものである。

註3. 仙台城三ノ丸跡Ⅲ期は、18世紀代の推定実年代が当てられている。

註4. 肥前陶器のⅣ期については、1690年~1780年代(元禄~天明年間)の推定実年代が当てられている。

註5. 仙台城三ノ丸跡Ⅱ期終末は、17世紀後半の推定実年代が当てられている。

註6. 「尾張陶磁」の登場Ⅲ期には、1655~1687年(明暦~貞享年間)の推定実年代が当てられている。

註7. 肥前磁器のⅣ期については、1690~1780年代(元禄~天明年間)の推定実年代が当てられている。

註8. 仙台山松木遺跡Ⅳ期前半については、18世紀~19世紀前半の推定実年代が当てられている。

### ②整地面の性格

整地面は、調査区南西部の急斜面から緩斜面に切り替わる部分の基本層序Ⅲ層及びⅣ層の一部を削平し、Ⅲ層上に盛土して造られた面である。その面積は、約700m<sup>2</sup>である。(第34図)。最高所と最低所では1m以上のレベル差が見られるが、なだらかに下る通路状の所であるため、この箇所を除いたレベル差は60cm前後となる。また、3号・4号溝跡によって「コ」字状に区画されている箇所に限定すれば、面積は約550m<sup>2</sup>で、レベル差は30cm前後となり、ほぼ平らであることが分かる。

この整地面上には、1号井戸跡、3号・4号溝跡、7号・8号・9号土壙、ピット群が存在する。これらの遺構は、削平されたⅢ層及びⅣ層上に掘り込まれたもの、盛土によって造られた面に掘り込まれたもの、双方にまたがるものに分けられる。それは以下のようになる。

- ・削平されたⅢ層及びⅣ層上に掘り込まれたもの………1号井戸跡、7号・8号土壙、ピット群
- ・盛土によって造られた面に掘り込まれたもの………9号土壙
- ・双方にまたがって掘り込まれたもの………3号・4号溝跡

9号土壙は、確認面が盛土によって作られた面であることから、整地面造成後に掘り込まれたものと推定される。1号井戸跡も断面形や堆積土の状況から、整地面造成後に掘り込まれたものと推定される。また、1号井戸跡、3号溝跡、整地面は、遺構間で遺物が接合する。また、前項①によって、整地面の年代は17世紀末～19世紀前半と推定されるが、この年代幅の中に収まる遺構には、1号井戸跡、7号・9号土壙、3号・4号溝跡がある。8号土壙、ピット群については時期不明である。

以上により、整地面は3号溝跡及び4号溝跡によって区画され、1号井戸跡、7号土壙、9号土壙を作り生活面であることが推定される。また、表面採取や基本層序Ⅰ層、整地面に於ける遺構を含めた地点から出土した陶磁器の比率を見ると、H用罐器が大半を占めることが分かる。この構成比率や遺物の出土状況から日常的な生活の場が存在した可能性が考えられる。しかし、日常的な生活の場を形成するであろう建物跡のものと推定される柱穴は、今回の調査では検出されなかった。

整地面検出地点の調査前の現況は山林であったが、それ以前は畠として使用されていた。当時、畠の所有者であった鹿野竹二郎によれば、畠を耕す際に障害となる数個の大石を除去して

種別	南		北		等		計	
	点数	比率(%)	点数	比率(%)	点数	比率(%)	点数	比率(%)
Ⅲ	52	36.36	17	42.50	69	37.70		
Ⅳ	5	3.50	13	32.50	18	9.34		
基	23	13.98	0	0.00	20	10.93		
等	4	2.80	3	7.50	7	3.82		
基	2	1.40	1	2.50	3	1.64		
等	4	2.80	0	0.00	4	2.18		
基	40	27.97	0	0.00	40	21.86		
火 焼	9	6.29	0	0.00	9	4.92		
陶製品	1	0.70	0	0.00	1	0.55		
紅 土	0	0.00	3	7.50	3	1.64		
伝統品	0	0.00	1	2.50	1	0.55		
等 墓	2	1.40	0	0.00	2	1.09		
小計	4	2.80	2	5.00	6	3.25		
計	142	100.00	40	100.00	183	100.00		

第37表 整地面出土陶器類器別構成比率  
(幕末～明治、明治以降を除く)

墓(5号土壙)の近くに移動した、とのことである。その大石は、確認の際、存在が確かめられている。このことにより整地面には柱根を直接上りに埋める獨立柱の建物ではなく、石の上に柱を据える通称「石場造」と呼ばれる建物が存在した可能性を考えておきたい。

また、「風土記御用書上」(『河南町誌』下)には「…、屋敷名 三十六……、郡出屋敷 武軒」とある。「風土記御用書上」は、藩内各村々の肝入に命じ、あるいは知行所単位で書き上げ提出させたもので、安永2年(1773)から始まり、全て提出完了したのは同九年(1780)である。これは、整地面が使用された推定年代17世紀末～19世紀前半の中に収まるものである。そこで、今回の調査によって検出された整地面上には、その中の一軒が存在していた可能性を考えておきたい。

#### (8) 遺構外出土遺物

基本層序Ⅱ層からは非ヨクロ使用の土師器窯が出土している。外面体部上半にヨコナデ、体部下半にヘラケズリ、内面にヘラミガキ、黒色処理が施されている。底部は損われているが、内外面とも多量の油煙が付着しており、1号住居跡出土の土師器窯と同様に燈明皿として用いられたものと考えられる。また墨化できなかったものの、内外面に油煙の付着した土師器窯は、もう1点出土している。出土地点も1号住居跡に近く、何らかの関係が考えられる。

基本層序Ⅰ層からは肥前産の染付碗が出土している(第39図)。体部に草花文、高台に二重の圓線、底部には底裏銘(読解できず)を有する。肥前磁器のⅣ期に相当する特徴を有し、おおむね18世紀代のものと考える。

表面採取されたものの中には唐津産の大鉢(第40図)、肥前産の染付皿(第41図)がある。唐津産の大鉢は三島手と呼ばれるもので、外側は鉄化粧、内面は灰釉で段花文等の象嵌手法による陰刻が施され、黒詰めの際に用いられる砂目の痕跡が認められる。底部には墨書が認められるが、読解できなかった。仙台城三ノ丸跡のⅢ期終末に相当する。肥前産の染付皿は、見込蛇の目釉剥ぎで、高台から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がる。仙台城三ノ丸跡のⅢ期終末からⅣ期にかけての時期に相当する。その他に唐津産の碗、產地不明の燭鉢(第35表)、肥前産の丸紋碗(第36表)等が表面採取されている。

上記のⅠ層及び表面採取の遺物については、全て整地面のある南西部平坦面から出土している。これらは、整地面が生活面として機能したと推定される17世紀末～19世紀前半までの年代幅の中に収まる。平坦面が畑として使用されていたことを考慮すれば、畑を耕した際に堆積土に混入あるいは地表に表れたものと考えられる。

## 2.まとめ

- 野田遺跡の発掘調査によって、以下のことがわかった。
- (1) 野田遺跡は、縄文、古墳、奈良、平安、中世、近世にわたる複合遺跡である。
  - (2) 8世紀末～9世紀代の古代の集落跡が検出された。
  - (3) 近世（17世紀末～19世紀前半）の生活面が検出された。
  - (4) 古代及び近世の埋葬遺構が検出された。
  - (5) 古代の集落跡からは、銅碗に近似した土瓶蓋が出土しており、銅碗について何らかの知識をもつ者がいた。
  - (6) 近世の生活面から出土した陶器、磁器の器種構成からみて、一般的な農民層・町民層とは区別して考えた方がよいものと思われる。
  - (7) 近世の生活面からは、陶器、磁器、石製品等が出土した。これらの大半は、仙台城三ノ丸跡、仙台市松木遺跡、松山町上野館跡で年代がわかっているものである。今回の調査では、実年代のわかる資料を共併しており、前記の遺跡での成果を裏付ける資料となった。
  - (8) 調査区南西部平坦面は、調査区へ向かって傾いており、遺跡の範囲は南側に向かって延びるものと推定される。

## 引用・参考文献(五十音順)

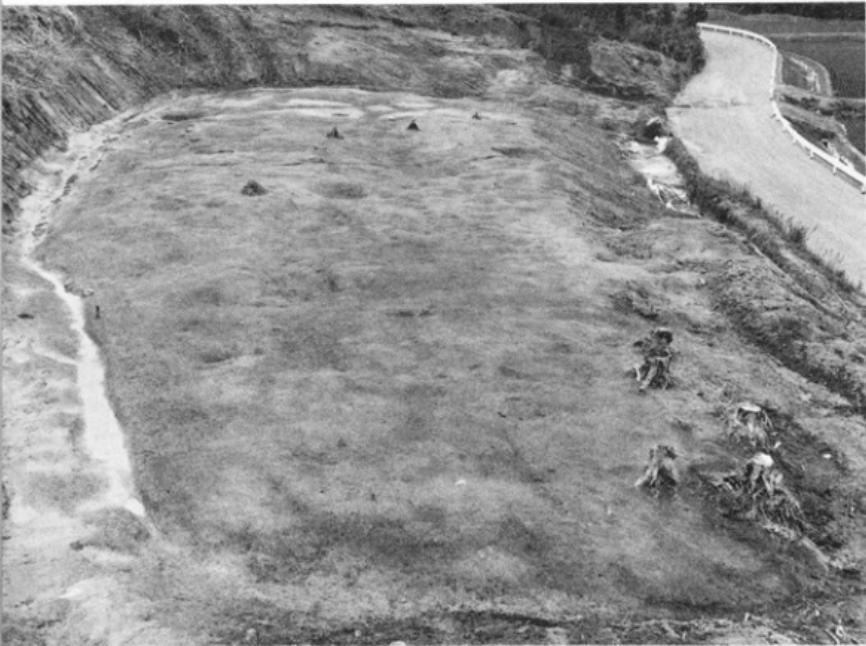
- 石井・柳沢(1982.3) : 「松島地域の地質」『仙台地質研究報告』 通商産業省工業技術院地質調査所
- 石川俊英(1990.3) : 「市川橋遺跡」『多賀城市文化財調査報告書第21集』 多賀城市教育委員会
- 石川・相沢(1992.3) : 「山王遺跡ほか」『多賀城市文化財調査報告書第29集』 多賀城市教育委員会
- 石川・相沢ほか(1987.3) : 「高崎遺跡」『多賀城市文化財調査報告書第12集』 多賀城市教育委員会
- 伊東信雄(1955) : 「宮城県加美郡上郷古墳群」『日本考古学年報』8 日本考古学協会
- 伊東信雄(1957.3) : 「古代史」『宮城県史』第1巻 宮城県
- 井上喜久男(1992.5) : 「尾便陶磁」 フュー・サイエンス社
- 柳富茂(1964) : 「福島県史」第6章 福島県
- 大河・嶋島ほか(1984.3) : 「梅木平遺跡・母御地区遺跡発掘調査報告15」『福島県文化財調査報告書第131集』 福島県教育委員会・鶴福島県文化センター
- 大橋康二(1989.10) : 「肥前陶磁」『考古学ライブリー55』 フュー・サイエンス社
- 小山・竹原(1987.1) : 「新版標準土色帖」 日本色研事業株式会社
- 河南町(1971.3) : 「風上記御用畫上」『河南町誌』下 河南町
- 仁藤・佐藤(1985.12) : 「御牛」『松木遺跡』『仙台市文化財調査報告書第95集』 仙台市教育委員会
- 斎藤・後藤(1985.3) : 「古川市宮沢遺跡」『宮城県文化財調査報告書第105集』 宮城県教育委員会
- 佐藤敏幸(1991.3) : 「御蔵堀跡」『河南町文化財調査報告書第5集』 河南町教育委員会
- 佐藤敏幸(1992.2) : 「第18回古代官衙遺跡検討会資料」
- 佐藤邦(1987.3) : 「六反畠遺跡Ⅲ」『仙台市文化財調査報告書第102集』 仙台市教育委員会
- 佐藤雄一(1986.11) : 「6版碑」『わがまち河南の文化財』 河南町教育委員会
- 清水東四郎(1924.12) : 「中山櫛」(作景山)(株生郡史跡)「宮城県史蹟名勝天然紀念物調査報告」2
- 白鳥・手冢(1992.3) : 「上野縮跡(Ⅱ)」『宮城県文化財調査報告書第149集』 宮城県教育委員会
- 鈴木省三(1924.12) : 「中山櫛」『宮城県史蹟名勝天然紀念物調査報告』1
- 高橋・阿部(1987.3) : 「須江櫛塚跡」『河南町文化財調査報告書第1集』 河南町教育委員会
- 高松・柳田ほか(1985.3) : 「広側遺跡発掘調査概報」 郡山市教育委員会  
郡山市埋蔵文化財発掘調査委員会
- 龍口卓(1990.3) : 「市川橋遺跡」『多賀城市文化財調査報告書第24集』 多賀城市教育委員会
- 水川・柳田ほか(1980.3) : 「谷地前川遺跡」舟棚地区遺跡発掘調査報告V『福島県文化財調査報告書第85集』 福島県教育委員会・鶴福島県文化センター
- 戸田昌(1987.12) : 「袖原古墳群」『鹿島町文化財調査報告書第6集』 鹿島町教育委員会
- 中野・佐藤(1990.3) : 「須江岡ノ人遺跡」『河南町文化財調査報告書第4集』 河南町教育委員会
- 中野裕平(1991.12) : 「平成3年度宮城県発掘調査選択発表会資料」
- 西弘治(1986.5) : 「土器様式の成立とその背景」寶陽社
- 日本貨幣商協同組合(1993.1) : 「日本貨幣型錄」1993年版
- 施沼・加藤ほか(1985.3) : 「色麻古墳群・色麻町西ノ木武跡・色麻古墳群」『宮城県文化財調査報告書第103集』 宮城県教育委員会
- 藤沼・白鳥ほか(1981.6) : 「日光山遺跡・東北自動車道遺跡調査報告書V」『宮城県文化財調査報告書第81集』 宮城県教育委員会

- 藤沼・小井川ほか（1989.3）：『宮城県の貝塚』『東北歴史資料館資料集』25 東北歴史資料館
- 松本彦七郎（1919.5）：「陸前国宝ヶ峯遺跡の分層的小堀発掘成績」『人類学雑誌』34の5
- 松木彦七郎（1919.9）：「宝ヶ峯遺跡について」『考古学雑誌』第9巻第9号
- 宮城県教育委員会（1988.1）：『宮城県遺跡地図』『宮城県文化財調査報告書第125集』  
宮城県教育委員会
- 二市・進藤ほか（1987.3）：『赤井浪跡第1次発掘調査報告』『矢本町文化財報告書第1集』  
矢本町教育委員会
- 盛岡市教育委員会（1989.3）：『志波城跡』 盛岡市教育委員会
- 結城・佐藤ほか（1985.3）：『仙台城三ノ丸跡』『仙台市文化財調査報告書第96集』 仙台市教育委員会
- 渡部紀（1988.3）：『下ノ内體遺跡』『仙台市文化財調査報告書第115集』 仙台市教育委員会
- （1971.）：『仙台領内古城名上』『仙台叢書』別巻

# 写 真 図 版



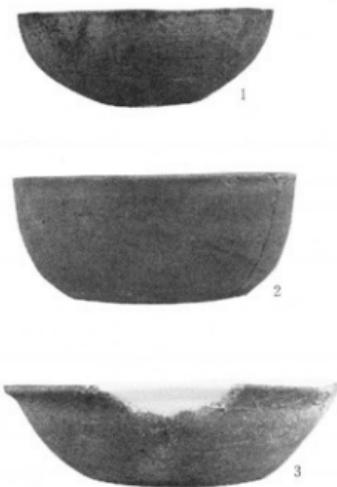
図版 1-1 群田遺跡調査区全景



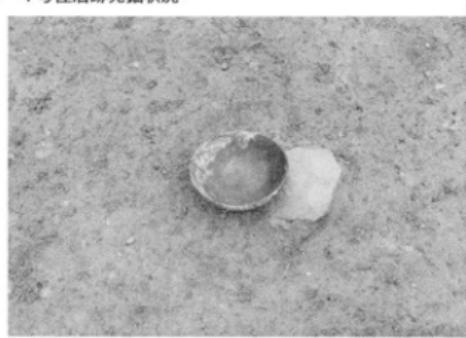
図版 1-2 II層上面完掘状況



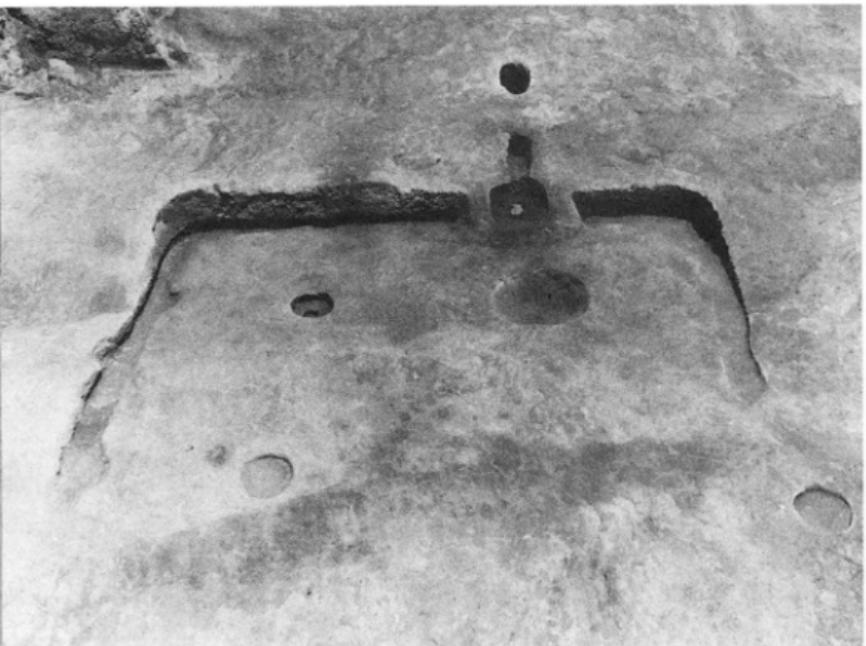
图版 2-1 1号住居跡完掘状况



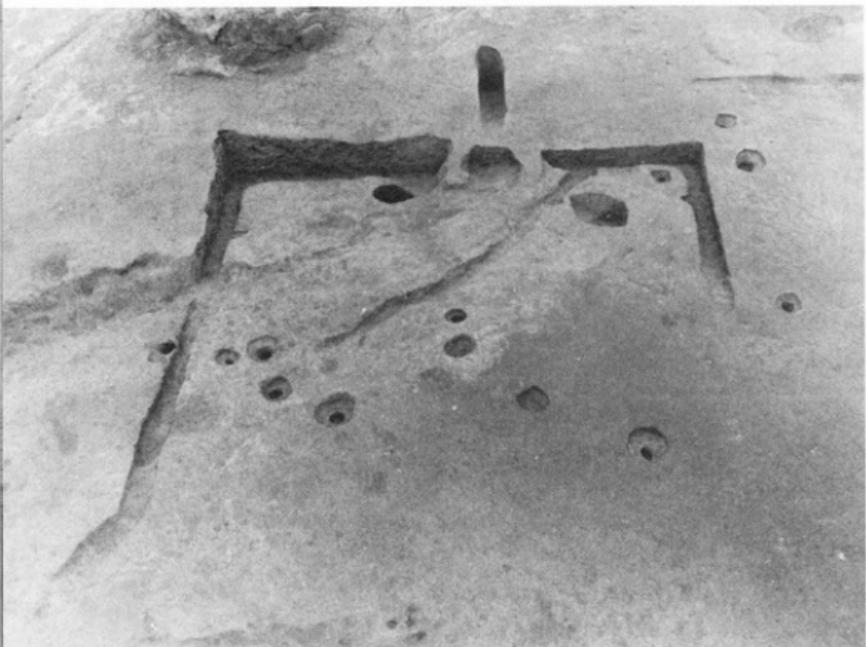
图版 2-2 1号住居跡出土遗物



图版 2-3 1号住居跡遺物出土状况 56



图版 3-1 2号住居跡完掘状况

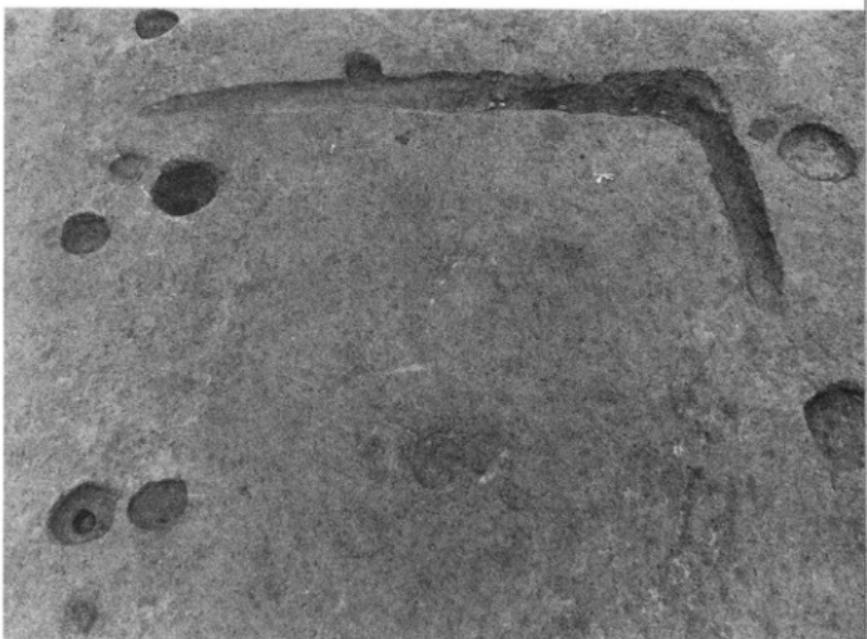


图版 3-2 3号住居跡完掘状况

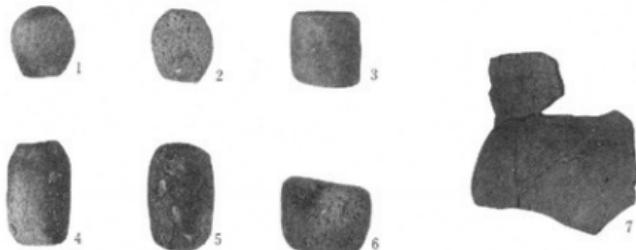


图版 4-2 2号住居跡出土遺物

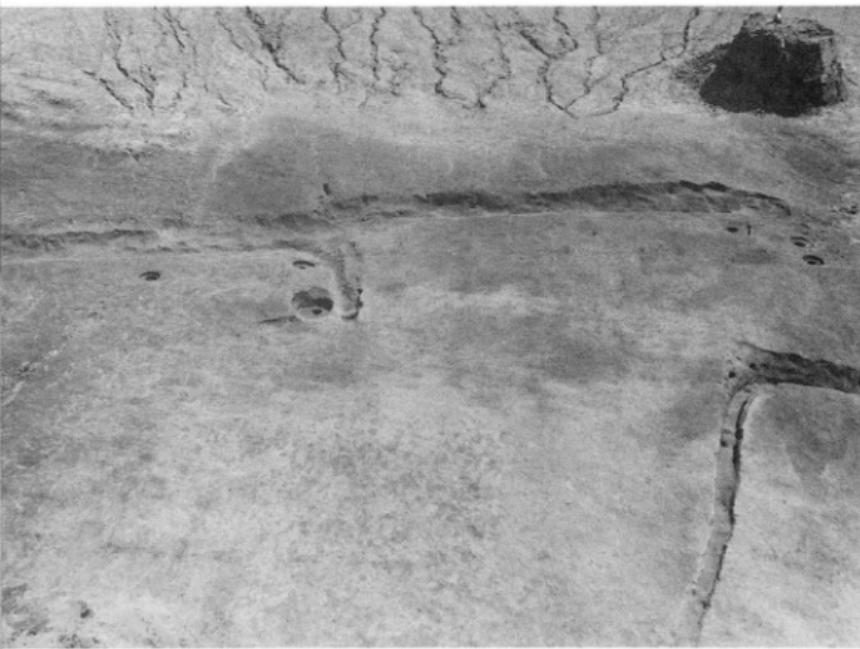
图版 4-1 2号住居跡遺物出土狀況



图版 4-3 1号竪穴遺構完掘状況



图版 4-4 1号竪穴遺構出土遺物



圖版 5-1 3號・7號豎穴遺構完掘狀況



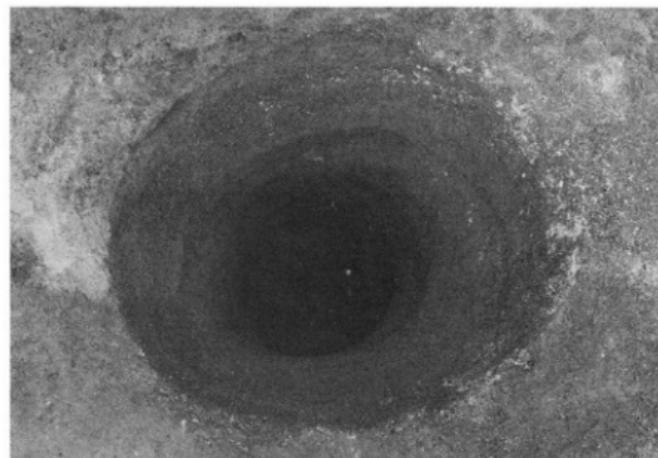
圖版 5-2 4號豎穴遺構完掘狀況



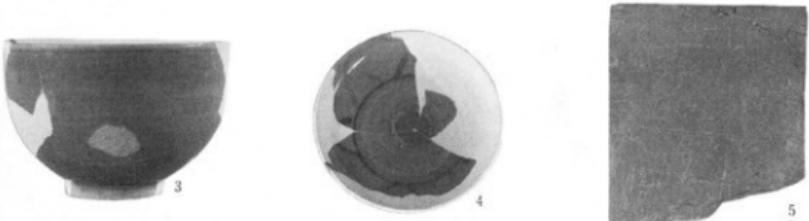
图版 6-1 5号竖穴遗構完掘状况



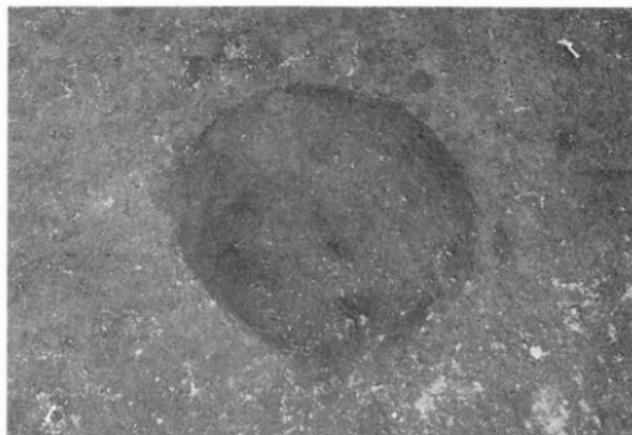
图版 6-2 6号竖穴遗構完掘状况



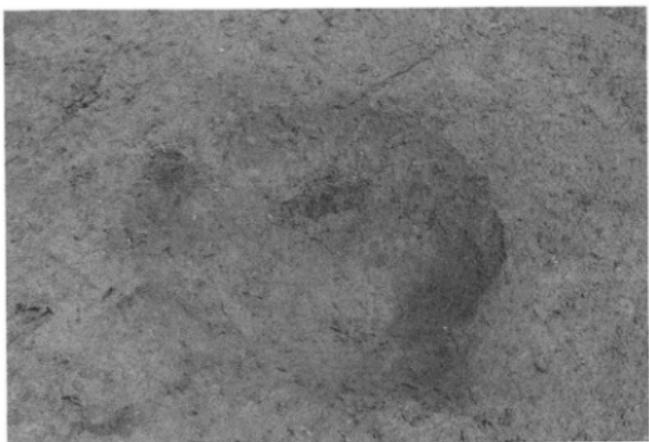
图版 7-1 1号井戸跡検出状況



图版 7-2 1号井戸跡出土遺物



图版 7-3 1号土壤完掘状况



图版 8-1 2号土壤完掘状况



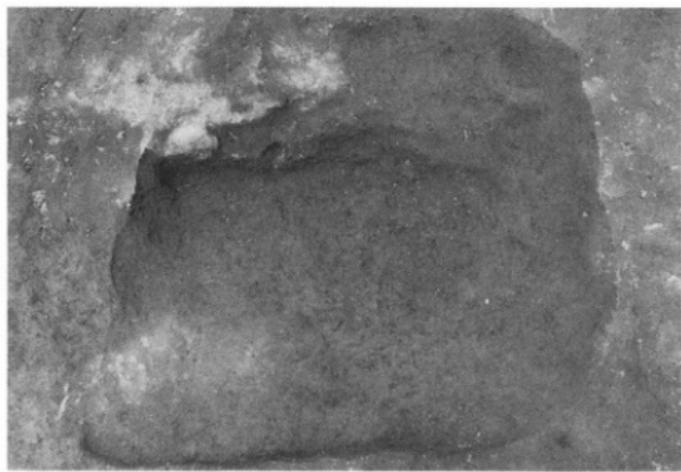
图版 8-2  
3号土壤出土遗物



图版 8-3 3号土壤完掘状况



图版 8-4 3号土壤确认面



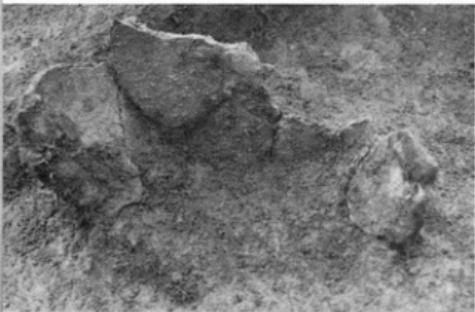
图版 9-1 4号土壤完掘状况



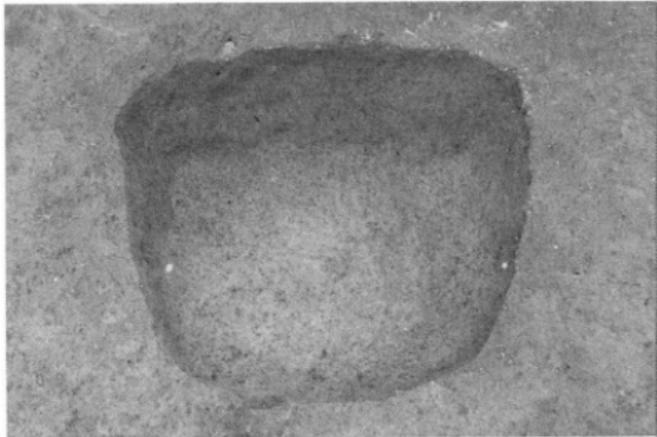
图版 9-2  
5号土壤出土遗物



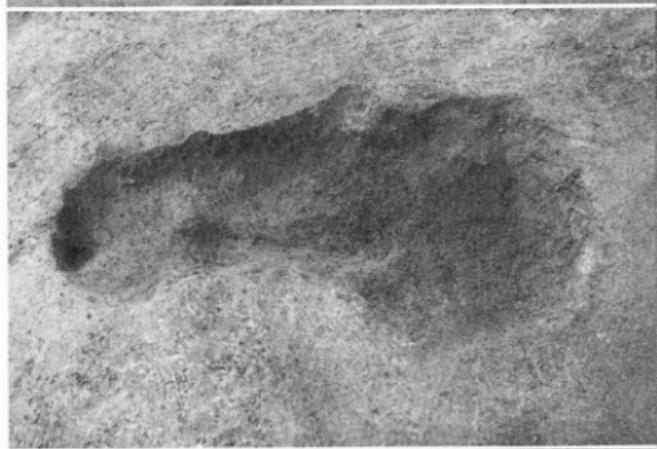
图版 9-3 5号土壤完掘状况



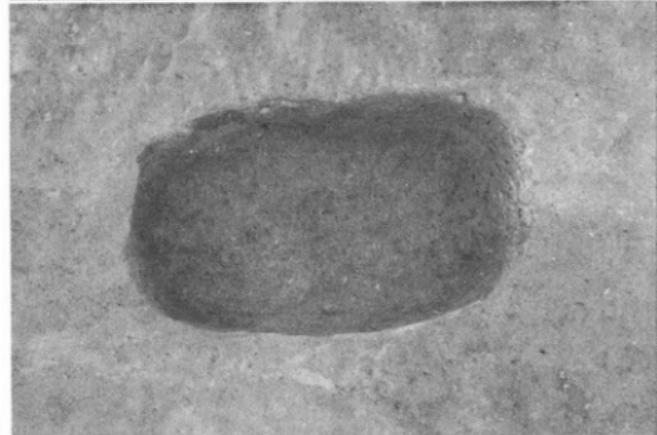
图版 9-4 5号土壤遗物出土状况



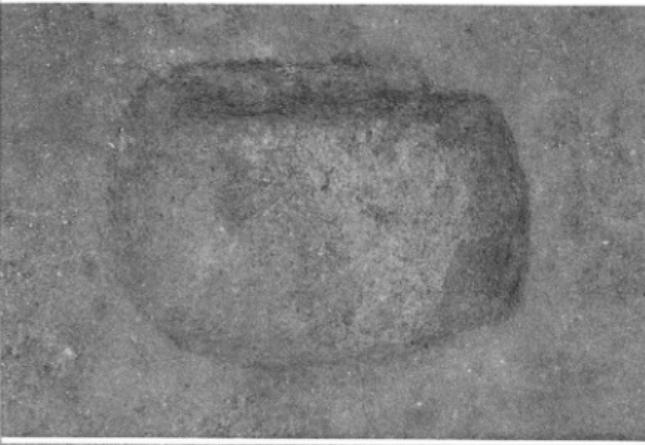
图版10-1  
6号土壤完掘状况



图版10-2  
7号土壤完掘状况



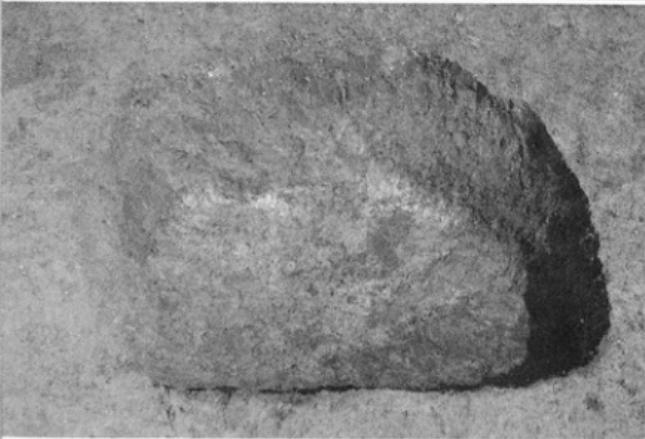
图版10-3  
8号土壤完掘状况



图版11-1  
9号土壤完掘状况

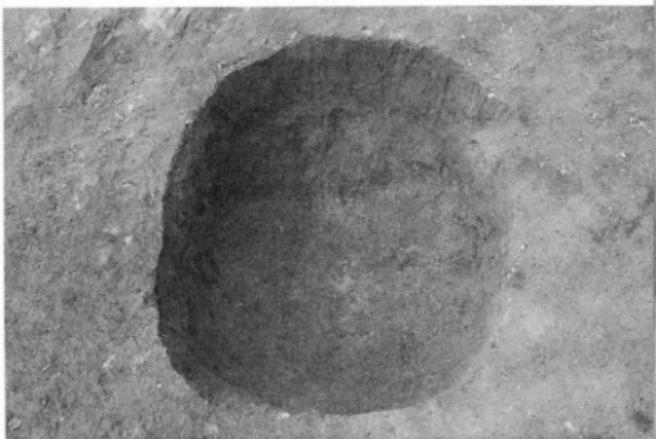


图版11-2  
1号烧土遗构完掘状况



图版11-3  
2号烧土遗构完掘状况

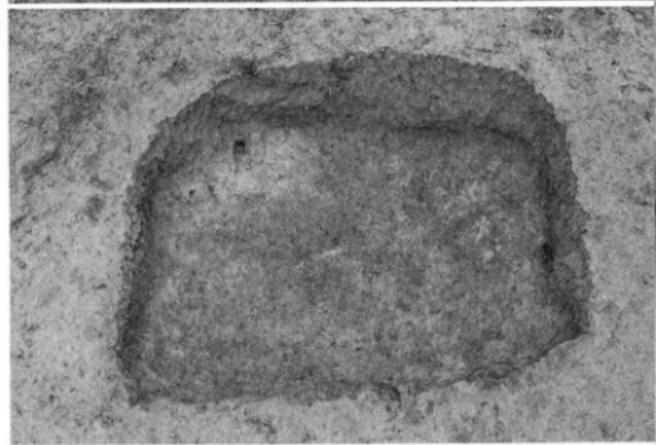
図版12-1  
3号焼土遺構完掘状況



図版12-2  
4号焼土遺構完掘状況



図版12-3  
5号焼土遺構完掘状況





圖版13-1  
6號燒土遺構完掘狀況



圖版13-2  
7號燒土遺構完掘狀況



圖版13-3  
7號燒土遺構側壁工具痕



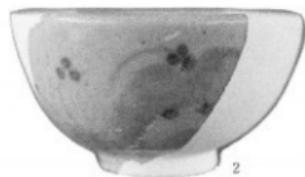
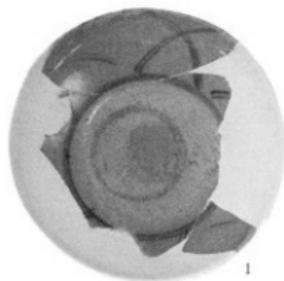
図版14-2  
2号溝跡・ピット群



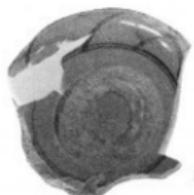
図版14-2  
III層出土遺物

図版14-3  
調査区南西部緩斜面  
完掘状況





图版15 3号墓出土遗物



5

6

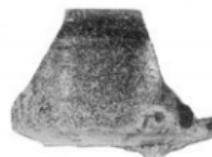
7

图版15 II层出土遗物(肥前)



8

9



10

图版15 II层出土遗物(床津)

图版15 III层出土遗物(酒井美清)



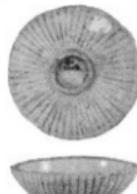
11



12



13



14

图版15 III层出土遗物(床津不明)



T层出土遗物(陶器, 瓦质土器, 石制品, 金翼制品, 古钱)



I 层出土遗物



## 河南町文化財関係出版物

『わがまち河南の文化財』昭和61年11月 P. 1~201

『河南町文化財調査報告書』第1集「須江城跡遺跡」昭和62年3月 P. 1~110

『河南町文化財調査報告書』第2集「須江開ノ入治跡詳細分布調査丘」昭和63年3月 P. 1~27

『河南町文化財調査報告書』第3集「須江開ノ入治跡詳細分布調査丘」平成元年3月 P. 1~25

『河南町文化財調査報告書』第4集「須江開ノ入治跡一工事用地造成に伴う発掘調査報告書」平成2年3月 P. 1~67

『河南町文化財調査報告書』第5集「御施設跡地一発掘調査報告書」平成3年3月 P. 1~21

『河南町文化財調査報告書』第6集「須江城跡 代官山遺跡」平成3年3月 P. 1~109

『河南町文化財調査報告書』第7集「須江城跡 開ノ入治跡」平成5年3月 P. 1~230

『河南町文化財調査報告書』第8集「群山遺跡」平成5年3月 P. 1~72

### 河南町文化財調査報告書 第8集

## 群山遺跡

### 発掘調査報告書

平成5年3月29日 印刷

平成5年3月31日 発刊

発行 河南町教育委員会  
〒387-13 青森県東吾妻郡河南町前谷字黒沢7  
TEL 0225(72)2111

印刷 株式会社 松弘堂  
〒386 青森県石巻市門脇字木原塚2番16  
TEL 0225(96)5555-9

